★

プロレタリアート独裁の歴史的経験

外文出版社
北京

プロレタリアート独裁の歴史的経験

外文出版社
北京

プロレタリアート独裁の歴史的経験

無産階級専政的歴史経験

（日本語版）

出版者のことば

本書はさきに翻訳出版した「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」（原文は一九五六年四月五日発表）と「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」（原文は一九五六年十二月二十九日発表）の二つの論文をあわせ収録したものです。

目次

プロレタリアート独裁の歴史的経験について……七
ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について……三

二十回大会

プロレタリアート独裁の歴史的経験について

（この文章は『人民日報』編集部が中国共産党中央委員会政治局拡大会議の討議にもとづいて書いたものである）

ソ同盟共産党第二十回大会は、国際関係と国内建設のあらたな経験を総結し、1社会制度の異なる国々が平和に共存できるというレーニンの政策をゆるぎなく実行してゆくこと、2ソビエト民主主義制度を発展させること、3党の集団指導の原則をあくまで守りとおすこと、4党内の欠点を批判すること、5国民経済発展のための第六次五ヵ年計画を定めることなどについて、一連の重大な決定をおこなった。

個人迷信に反対する問題は、ソ同盟共産党第二十回大会で重要な地位をしめている。第二十回大会は、個人迷信が流行していることを極めてするどくあばきだしたが、この現象は、かつて長いあいだ、ソ同盟の生活のなかで、活動上の誤りとわるい結果をたくさんうみだしたのであった。ソ同盟共産党が自己のおかしたこれまでの誤りについておこなったこの勇敢な自己批判は、党内生活の高い原則性とマルクス・レーニン主義の偉大な生命力をあらわすものであった。

批判のし方の誤りについて
「スターリン問題について」
←P.17

党の自己批判

搾取階級に奉仕し、政権についている政党あるいは政治団体で、自分たちの党員大衆をまえにし、人民大衆をまえにして、自己の大きな誤りを真剣にあばきだすことを敢てしたものは、いままでの歴史にもなかったし、現在のどんな資本主義国にも、ひとつもない。ところが、労働者階級の政党は、それとはまったく異なっている。労働者階級の政党は、広はんな人民大衆に奉仕する政党であって、このような政党にとっては、自己批判をおこなうことによって、誤りを失うほか、なにひとつ失うものとてはなく、得るものはかえって、広はんな人民大衆の支持である。

世界のあらゆる反動派は、さいきん一ヵ月あまりのあいだ、個人迷信についてのソ同盟共産党の自己批判にたいして、まるで鬼の首でもとったように取り沙汰している。彼らはいう、それみたことか！　世界ではじめて社会主義制度をうちたてたソ同盟共産党でさえ重大な誤りを犯した、しかもそうした誤りを犯したのが、あのひじょうな名声を博し、栄誉をになっていた指導的人物のスターリンなのだ、と。反動派は、いまこそ、ソ同盟や各国の共産党を中傷することのできる材料をにぎったと考えている。しかし、反動派は、けっきょく「骨折り損」に終わるほかない。マルクス主義の代表的人物がどんな著作のなかで、われわれは永久に誤りを犯すことはないとか、ある特定の共産党員だけは絶対に誤りを犯すことはないなどと、かつて述べたことがあっただろうか？

「誤り」と自己批判

われわれ共産党員の党内生活に批判と自己批判の制度があるのは、われわれマルクス・レーニン主義者が、大小いずれの誤りも犯すことのない「神の如き人間」などというものがあるとはもともと考えていないからではないだろうか？　ましてや、世界史上に前例のない、プロレタリアート独裁をはじめて実行した社会主義国家が、あれこれの誤りを犯すことはないなどといったことがどうして考えられるであろうか？

一九二一年十月に、レーニンはつぎのようにのべた。

「われわれのソビエト体制をわれわれが建設する場合の失敗や誤りにたいして、瀕死のブルジョアジーやこれにくっついてゆく小ブルジョア的民主主義の犬ころや豚どもが、呪詛、雑言、嘲笑をさんざん浴せかけるというなら、そうさせておけ。われわれのところには、失敗や誤りが実際たくさんあったし、いまもまた、たくさんやられている。このことをわれわれは、たとえ一分間でも忘れはしない。いまだかつてみられなかったような型の国家機構を創造するという、こういう新しい、全世界史にとっても新しい仕事をするうえに、失敗や誤りなしにすまそうなどとはとんでもない話だ！　われわれは、われわれの失敗や誤りを是正するために、そしてソビエト的諸原理を実際に運用するという、およそ完成にはほど遠いわれわれのこの仕事を改善するためには、うまずたゆまずたたかってゆこう。」

はじめになんらかの誤りを犯せば、もう二度とほかになんらかの誤りを犯すことは必然的に永

誤りを繰り返えすことは避けられない

搾取階級は誤りを繰り返えすことの性質をもつが、ミリ大な誤りをおかして滅亡する

遠にありえないとか、また、もとおかした誤りを多かれ少なかれ再びくりかえすことも必然的にありえないなどということは、これまた考えられないことである。人類社会は、利害を異にするいくつかの階級にわかれていらい、奴隷主の独裁、封建領主の独裁、ブルジョアジーの独裁を経てきており、これらの独裁はいく千年ものあいだつづいた。そして、十月革命が勝利していご、人類ははじめて、プロレタリアートの独裁を経験するようになった。まえの三つの独裁はいずれも搾取階級による独裁であるが、封建領主の独裁は奴隷主の独裁よりもいくらか進歩的であり、ブルジョアジーの独裁は封建領主の独裁よりもさらにいくらか進歩的である。社会の発展史上で一定の進歩的な役割を演じたこれらの搾取階級は、総じて、ながいあいだに無数の歴史的な誤りを犯したばかりでなく、いくども誤りをくりかえすことによって、はじめてその支配の経験をつむことができたのであった。しかし、彼らの代表する生産関係と生産力とのあいだの矛盾がするどくなるにつれて、彼らは、なおも不可避的により大きな、より多くの誤りを犯して、被圧迫階級の大規模な反抗と彼らじしんの内部的崩壊をまねき、ついには自己の滅亡をはやめた。プロレタリアートの独裁は、それいぜんのどのような搾取階級の独裁ともまったく性質のちがったものである。それは被搾取階級による独裁であり、多数者の少数者にたいする独裁であり、搾取のない、貧困のない社会主義社会をつくりだすための独裁であり、人類史上もっとも進歩した、そし

プロ独——多くの誤りを犯さないわけにはいかない

権力の集中と民主主義

プロ独の優位

てまた最後の独裁である。このような独裁は、歴史上もっとも偉大にして、もっとも困難な任務をにない、歴史上もっとも複雑な状況ともっとも曲折にとむ闘争に直面しているので、その仕事も、レーニンがのべたように、多くの誤りを犯さないわけにはいかないのである。もしも一部の共産党員がおごり高ぶっていい気になったり、思想の硬化をきたしたりするようなことがあれば、彼らはいぜん自分がおかした誤り、または他人の犯した誤りをくりかえすようなことにさえなる。この点を、われわれ共産党員はじゅうぶん考えにいれておかなければならない。強大な敵にうち勝つために、プロレタリアートの独裁は、権力の高度の集中を要求する。この高度に集中された権力は、高度の民主主義とむすびつかなければならない。集中制が一方的に強調されると、多くの誤りを生じることになる。この点も、人びとのまったく理解できるところである。しかし、どのような誤りがあるにせよ、人民大衆にとっては、プロレタリアートの独裁の制度は、搾取階級による独裁のあらゆる制度より、ブルジョアジーの独裁の制度より、なんといってもはるかにまさっている。レーニンのいった、「もしわれわれの敵が、ボリシェビキがずいぶんばかげたことをやったということはレーニン自身が認めているではないか、といって、われわれを責めるならば、わたくしはこれにたいしてつぎのように答えたい。——そのとおり、だが、それでもわれわれのばかげたことは、やはりあなたがたのとはまったくちがった種類のものであること

搾取階級は誤りを正すことができない。

をご存じないか、と。」というこのことばはまったく正しい。搾取階級は、略奪を目的としているところから、つねに彼らの独裁を永久に、子々孫々にいたるまでたもちつづけたいとのぞみ、これがためあらゆる手段をもちいて人民をしいたげるのであって、彼らの誤りはただすことのできないものである。ところが、プロレタリアートは、人民を物質的に精神的に解放することを目的としているところから、自己の独裁という条件を活用して、共産主義を実現し、人類の融和を実現することによって、自己の独裁をしだいに消滅させてゆくのであるから、人民大衆の主動的な精神と積極的な役割をできるかぎり発揮させるのである。ところで、プロレタリアートの独裁のもとで、人民大衆の主動的な精神と積極的な役割が無限に発揮できるというこのことのなかには、プロレタリアートの独裁の時期におかすさまざまな誤りをただしうることも当然ふくまれているのである。

人民の主導性

誤りを正す

指導者の責任

責任を果すためには

共産党と社会主義国家の各方面の指導的人物の責任は、できるかぎり誤りをすくなくし、重大な誤りはできるかぎり犯すことをさけ、個々の、局部的な、一時的な誤りのなかから教訓をくみとることに注意をはらい、これら個々の、局部的な、一時的な誤りを全国的な、長期にわたる誤りにたちいたらせないように努めることである。そして、この目的をはたすに必要なことは、すべての指導者が、きわめて慎みぶかく謙虚であり、大衆としっかりむすびつき、ことあるごとに

スターリンの誤り

大衆と相談し、実際状況をくりかえし調査研究し、たえず実情にあった、適切な批判と自己批判をおこなうことである。党と国家のおもな指導者としてのスターリンが、その後期の活動のなかである種の重大な誤りを犯したのは、彼がそういうふうにしなかったがためである。彼はおごりたかぶり、慎みぶかさを失い、その考えのうえに主観主義がうまれ、一面的なところが生じて、ある種の重大な問題について誤った決定をくだし、ゆゆしい悪結果をもたらしたのであった。

偉大な十月社会主義革命の勝利によって、ソ同盟人民とソ同盟共産党は、レーニンの指導のもとに、世界の六分の一をしめる地上にはじめて社会主義国家をうちたてた。ソ同盟は、急速に社会主義的工業化を実現し、農業の集団化を実現し、社会主義的な科学と文化を発展させ、ソビエト同盟というかたちのもとで国内の多くの民族の強固な同盟を形成した。そして、ソ同盟内の立ちおくれていた民族は社会主義的民族にかわった。第二次世界大戦中には、ソ同盟は、ファシストを打ちやぶる主力となってヨーロッパ文明をすくうとともに、東方の人民が日本軍国主義を打ちやぶるのを援助したのであった。これらすべての輝かしい成果は、全人類に社会主義と共産主義の光明にみちた前途をさししめし、帝国主義の支配を大きくゆるがし、恒久平和をめざす全世界の闘いのなかで、ソ同盟を最初の、そしてもっとも強固な保塁にした。ソ同盟は、他のすべての社会主義国の建設をはげまし、これを支持し、全世界の社会主義運動と植民地主義反対運動、

スターリンの不滅の功績

人類の進歩をめざすあらゆる運動をはげました。これらはすべて、ソ同盟人民とソ同盟共産党が人類史上にうみだした偉大な業績である。こうした偉大な業績をうみだす道をソ同盟人民とソ同盟共産党にさし示したのは、レーニンであった。レーニンの方針を実現するためにおこなった闘争のなかには、ソ同盟共産党中央委員会の強力な指導の功績があり、そのなかには、当然スターリンの不滅の功績がふくまれている。

レーニンの死後、党と国家のおもな指導的人物としてのスターリンは、マルクス・レーニン主義を創造的に運用し発展させた。そして、レーニン主義の遺産をまもり、レーニン主義の敵――トロツキストやジノヴィエフ一味、その他ブルジョアジーの代理人に反対する闘いのなかで、彼は人民の意志と願望とを示したのであり、傑出したマルクス・レーニン主義の闘士としての名にそむかなかった。スターリンがソ同盟人民の支持をえ、歴史上で重要な役割をはたすことができたのは、まず第一に、彼がソ同盟共産党のその他の指導者といっしょになってソビエト国家の工業化と農業集団化についてのレーニンの路線をまもったがためであった。ソ同盟共産党は、この路線を実行にうつして、ソ同盟において社会主義制度の勝利をもたらすとともに、ヒトラーに反対する戦争でソ同盟が勝利をかちとる条件をもつくりだした。そして、ソ同盟人民のこれら一切の勝利は、全世界の労働者階級とすべての進歩的な人びとの利益に合致するものであった。その

スターリンの誤り

ために、スターリンというこの名も、おのずから全世界できわめて高い栄誉をになうようになった。ところがスターリンは、レーニン主義の路線を正しく運用して国内国外の人民のあいだできわめて高い栄誉をになうようになると、間違いもはなはだしく自分のはたした役割を不相応なまでに誇示し、かれ個人の権力を集団指導と対立する地位においた。その結果、自分自身のある種の行動は、自分がもともと宣伝してきたマルクス・レーニン主義のなかのいくつかの基本的な観点と対立する地位におかれるようになった。一方では、人民大衆こそ歴史の創造者であることを認め、党は永久に大衆とむすびつかなければならないとし、党内の民主主義を発展させ、自己批判と下から上への批判をさかんにしなければならないことを認めながら、他方では、かえって個人迷信をうけいれ、それを奨励し、個人の専断で事をはこび、このために、スターリンはその後期に、この問題において、理論と実践がくいちがうという矛盾に陥った。

マルクス・レーニン主義者は、指導的人物の歴史上における大きな役割をみとめている。人民と人民の政党には、人民の利益と意志を代表し、歴史的な闘争の最前線にたって人民大衆をみちびいてゆく先進的な人物が必要である。個人の役割をみとめず、先進的人物と指導的人物の役割をみとめないのは、まったく誤っている。しかし、党と国家のどのような指導者にせよ、個人を党と大衆のなかにおかないで、逆に個人を党と大衆のうえにおき、大衆から浮いてしまうと、国

個人を大衆の上におくと誤る

スターリンの誤り

スターリンの大きな誤り

4 3 2 1

個人迷信は遺物

事についての全面的な洞察力を失ってしまう。そうなれば、たとえスターリンのような傑出した人物でも、ある種の重大な事柄について、やはり実際に合わないまちがった決定をくだすことはさけられない。スターリンは、ある種の問題について、個々の、局部的な、一時的な誤りのなかから教訓をくみとり、それらの誤りを全国的な、長期にわたる重大な誤りにたちいたらせないようにすることができなかった。スターリンは、その後半生において、いよいよ個人迷信をよろこぶようになり、党の民主集中制に違反し、集団指導と個人責任制をむすびつける制度に違反した。そのため、つぎのようないくつかの大きな誤りがおこった。それは、1、反革命分子の粛清問題のうえで拡大化があったこと、2、反ファシスト戦争の直前に必要な警戒心を欠いていたこと、3、農業のいっそうの発展と農民の物質的福祉について当然はらうべき注意を欠いていたこと、4、国際共産主義運動についていくつかの誤った意見を出したこと、とりわけユーゴスラビアの問題について誤った決定をおこなったことなどである。スターリンは、これらの問題について、主観的、一面的になり、客観的な実際状況からはなれ、大衆から浮きあがった。

個人迷信は、これまでながいあいだの人類の歴史がのこした、くされはてた遺物である。個人迷信は、搾取階級のなかにその基礎があるばかりでなく、小生産者のなかにもその基礎がある。周知のように、家父長制は小生産経済の産物である。プロレタリアート独裁がうちたてられたの

古い思想は非常に長く残る＝習慣の力→社会現象の反映

ち、たとえ搾取階級が絶滅され、小生産経済が集団経済にとってかわられ、社会主義がうちたてられたのちでも、ふるい社会のくされはてた、毒素をふくんだある種の思想の残りかすは、なおも人びとの頭脳のなかでひじょうにながいあいだ生きのびる。「いく百千万の人びとの習慣の力は、もっとも恐ろしい力である。」（レーニン）個人迷信もいく百千万の人びとの一種の習慣の力である。こうした習慣の力がなお社会にのこっている以上、それが多くの国家勤務人員に影響をおよぼすことはありうるし、スターリンのようなこうした指導的な人物でさえも、その影響をうけたのである。個人迷信は人びとの頭脳に社会現象が反映したものであり、スターリンのような党と国家のこういう指導的人物までがこうしたおくれた思想の影響をうけた場合、それは、逆にまた社会へ影響をおよぼし、事業の損失をまねき、人民大衆の主動性と創意性をそこなうことになる。

発展しつづけている社会主義的生産力、社会主義的経済制度と政治制度、党生活は、個人迷信という精神状態とますます矛盾し、衝突しあうようになっている。ソ同盟共産党第二十回大会がくりひろげた個人迷信に反対する闘いこそは、まさしく、ソ同盟共産党員とソ同盟人民がその前進の途上でおこなった、思想的な障害物を一掃するための偉大な、勇敢な闘争である。

社会主義社会ではもはや矛盾などありえないというような単純な考え方がある。矛盾の存在を

→P.7

みとめないことは、とりもなおさず弁証法を否認することである。それぞれの社会のもつ矛盾の性質はおなじでないし、矛盾を解決する方法もちがうけれども、社会はつねにたえまない矛盾のなかで発展してゆく。社会主義社会もまた、生産力と生産関係の矛盾のなかで発展するものである。社会主義社会でも共産主義社会でも、技術の革新、社会制度の革新という現象は、かならずひきつづきおこるのであって、そうでなければ、社会の発展は停止し、社会は前進できなくなってしまう。人類はいまもなお青年期にある。人類がこんごあゆんでゆく道は、これまであゆんできた道よりも何倍ながいかわからない。革新と保守、先進と落後、積極と消極というこうした矛盾はいずれも、各種のちがった条件、いろいろと異なった状況のもとで、たえず現われるであろう。万事あいかわらず、つぎのように運ばれるであろう。つまり、ひとつの矛盾が他の矛盾をよびおこし、ふるい矛盾が解決されるとあらたな矛盾がまた生まれてくるのである。観念論と唯物論の矛盾は、社会主義社会または共産主義社会ではなくなってしまうと考えているものがあるが、この見解はあきらかに正しくない。主観と客観の矛盾がなお存在するかぎり、先進と落後の矛盾がなお存在するかぎり、社会の生産力と生産関係の矛盾がなお存在するかぎりは、唯物論と観念論の矛盾は、社会主義社会や共産主義社会でもやはり存在するし、さまざまなかたちをとって現われてくるであろう。人間は社会のなかで生活しているのであるから、さまざまなちがった

社会主義、共産主義社会の矛盾

共産主義社会における観念論と唯物論の矛盾

共産主義社会における人と人との関係

状況やちがった程度において、それぞれの社会のなかの矛盾を反映する。したがって共産主義社会になっても、ひとりびとりがみな完全無欠な人間になるということはありえない。そのときになっても、人間にはやはりそれぞれの矛盾があり、やはりよい人間とわるい人間があり、やはりわりあい正しい考えをもつものと、わりあい正しくない考えをもつものとが存在するであろう。したがって、人と人とのあいだにもやはり闘いがあり、ただ闘いの性質とかたちが階級社会とはちがうだけである。こういうふうに見てくると、社会主義社会で、個人と集団のあいだに矛盾した現象があるというのは、なにも不思議なことではない。そして、党と国家のどのような指導的人物であろうと、もしも集団指導から逸脱し、人民大衆からうきあがり、実際生活から遊離したならば、彼らは必然的にその考えが硬化して、重大な誤りを犯すことになる。われわれにとってぜひとも警戒しなければならないのは、一部の人びとが、党と国家が仕事のうえで多くの成果をあげたために彼ら自身人民大衆から大きな信頼をえると、こうした大衆の信頼を利用して権威を濫用し、いくつかの誤りをおかす可能性がある、ということである。

中国共産党は、ソ同盟共産党が個人迷信に反対するというこの歴史的な意義をもつ闘争においておさめた大きな成果に祝意を表するものである。中国革命の経験がおなじく証明しているように、人民大衆の知恵にたより、民主集中制にたより、集団指導と個人責任制をむすびつける制度

つねに注意すること

1943年6月 指導方法についての決定

にたよることによってのみ、はじめてわが党は、革命の時期においても、国家建設の時期においても、偉大な勝利と成果をかちとることができたのである。中国共産党はこれまで、革命の隊伍のなかで、大衆からはなれた個人の出しゃばりと個人英雄主義にたえず反対してきた。大衆からはなれた個人の出しゃばりや個人英雄主義といった現象が、これからも長いあいだ存在することは疑いのないところである。それは、いちど克服しても、また現われてくる。ときにはこの人たちに現われ、ときにはまたあの人たちに現われる。人びとは、個人の役割に注意をひかれると、大衆や集団の役割を見おとすのがつねである。このため、一部の人は度はずれにうぬぼれたり、自己を妄信したり、あるいは他人を盲目的に迷信する誤りを犯しやすい。したがって、大衆からはなれた個人の出しゃばりや個人英雄主義に反対し、個人迷信に反対するということは、つねに注意をはらわなければならない問題である。

主観主義的な指導方法に反対するため、中国共産党中央委員会は、一九四三年六月、指導方法についての決定をおこなった。いま党の集団指導の問題について述べるにあたって、この決定に言及することは、中国共産党の全党員と党のすべての指導的な人びとにとって、やはり有益である。この決定には、つぎのように述べられている。「わが党のすべての実際活動においては、おおよそ、正しい指導というものは、大衆のなかから出て、大衆のなかにはいってゆくのでなけれ

大衆路線

ばならない。それは、つまり、つぎのことを意味している。すなわち、大衆の意見（分散的な系統だっていない意見）を集約したうえ（研究を通じて、集約した、系統だった意見にかえたうえ）、ふたたび大衆のなかにもちこんで宣伝し、説明して、大衆の意見にし、大衆がそれを堅持し、行動にあらわすようにしむけるとともに、大衆の行動のなかでこれらの意見が正しいかどうかをためす。そして、そのうえで、さらに大衆のなかから集約してふたたび大衆のなかにもちこんで堅持されるようにしてゆく。このようにして、かぎりなく繰り返してゆくなかで、一回ごとに、より正しい、より生き生きとした、より豊富なものになってゆくのである。これが、つまり、マルクス主義の認識論である。」わが党内では、こうした指導方法は、ずっと「大衆路線」という一般的な名で呼ばれてきた。われわれの活動の全歴史は、われわれにこう教えている。おおよそ、この路線を守ってゆけば、活動はつねに立派な、あるいはわりと立派なものとなり、たとえ誤りを犯しても容易にあらためることができるが、おおよそこの路線をふみはずすと、その活動はつねに挫折する。これがマルクス・レーニン主義の指導方法であり、マルクス・レーニン主義の活動路線である。革命の勝利をえ、労働者階級と共産党が全国の政権を指導する階級となり政党となると、わが党と国家の指導的な勤務人員は、多方面から官僚主義の襲撃をうけたために、国家機関を利用して独断専行し、大衆からうきあがり、集団指導から逸脱し、命令主義にはしり、

党と国家の民主主義制度を破壊するかもしれないというきわめて大きな危険に直面した。したがって、われわれがそうした泥沼に足をふみこむまいとするならば、このような大衆路線による指導方法を実行するように一段と注意をはらうべきであって、いささかもこれをゆるがせにしてはならない。このため、われわれは一定の制度をうちたてて、大衆路線と集団指導をあくまでつらぬきとおすことを保証し、こうして、大衆からはなれた個人の出しゃばりや個人英雄主義をさけ、われわれの活動中における、客観的な実際状況からはなれた主観主義と一面性を少なくする必要がある。

われわれはまた、個人迷信に反対するソ同盟共産党の闘いのなかから教訓をくみとり、教条主義に反対する闘いをひきつづき展開してゆかなければならない。

労働者階級とその他の人民大衆はマルクス・レーニン主義にみちびかれて革命に勝利し、国家権力をかちとったが、革命の勝利と革命政権の樹立はまた、マルクス・レーニン主義の発展のためにかぎりなくひろい道をきりひらいた。ところが、革命の勝利をえてからは、マルクス主義が全国の指導的な思想として公認されているために、われわれの宣伝活動家のなかには、とかく行政権力と党の威信にたよって、マルクス・レーニン主義を教条として大衆につきこむだけで、生けんめい努力し、多くの材料を把握し、マルクス・レーニン主義による分析の方法をもちい、

スターリンの著作とよぶこと

一般のことばで、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国の具体的な状況とのむすびつきをじゅうぶん納得のゆくように説明していないものが少なくない。数年らいわれわれは哲学、経済学、歴史、文学・芸術批評などの研究分野で、いくつかの成果をおさめてきたが、一般的にいって、不健全な状態がまだかなりのこっている。われわれの研究人員のなかには、いまなお教条主義の習癖をもち、自分の考えを縄でがんじがらめにしばりあげ、ひとり立ちで考える能力と創造的精神に欠け、ある面ではスターリンにたいする個人迷信の影響をうけているものもすくなくない。ここで指摘しておかねばならないのは、スターリンの著作は、やはりこれまでとおなじように真剣に研究しなければならないということであって、およそ、彼の著作のなかの有益なもの、とりわけレーニン主義をまもり、ソ同盟の建設経験を正しく総結した彼の多くの著作を、われわれはすべて重要な歴史的遺産としてうけとるべきである。そうしないのは、誤りである。しかし、それには、ふたとおりの研究方法がありうる。つまり、ひとつはマルクス主義的方法で、ひとつは教条主義的方法である。あるものは教条主義的方法でスターリンの著作に接し、その結果、そのなかの正しいものと正しくないものとを区別することができないし、その正しい内容でも、これを万能薬あつかいして、一本調子にあてはめている。これではどうしても誤りはさけられない。たとえば、スターリンはかつてつぎのような定式をだしている。すなわち、革命のそれ

主要打撃 → 主な敵
中立化 ← 中間勢力
同盟 ←

スターリンの主要打撃論の検討と批判

ぞれの時期において、基本的な打撃の方向は、その時期における中間の社会的、政治的勢力を孤立させることにある、というのである。スターリンのこの定式にたいしては、マルクス主義的な批判的観点をもってのぞみ、個々のばあいについてよく検討しなければならない。ある条件のもとでは、中間勢力を孤立させることが正しい場合がありうる。しかし、中間勢力を孤立させることがどのような条件のもとでもつねに正しいとはかぎらない。われわれの経験によると、革命の主要打撃の方向は、もっとも主要な敵に向け、これを孤立させるべきである。そして、中間勢力にたいしては、これと連合しながらまたこれと闘う政策をとるべきであり、すくなくもこれを中立化させるべきである。さらに、条件がゆるすならば、全力をあげて中間勢力が中立的な立場からこちらに転じてくるようにしむけ、われわれと同盟をむすばせるようにして、革命の発展を有利にしなければならないのである。

ところが、かつてある時期（一九二七年から一九三六年までの十年間にわたる国内革命戦争の時期）に、われわれの一部の同志は、スターリンのこの定式を中国革命に機械的にあてはめて、主要打撃の方向を中間勢力にむけ、これをもっとも危険な敵であるとした。その結果、真の敵を孤立させえなかったばかりか、かえって自分自身が孤立し、自分自身が損害をこうむり、真の敵を有利にしたのであった。教条主義のこの誤りにかんがみ、中国共産党中央委員会は、抗日戦争の時期に、日本侵略者を打ちやぶるため、「進歩勢力を発展さ

せ、中間勢力を味方にひきいれ、頑固勢力を孤立させる」という方針をうちだした。ここでいう進歩勢力とは、共産党が指導している、または影響をあたえることのできる労働者、農民、革命的知識分子の力のことである。ここでいう中間勢力とは、民族ブルジョアジー、各民主党派、無党無派の民主人士のことである。ここでいう頑固勢力とは、抗日には消極的で、反共には積極的な、蔣介石を頭とする買弁的な封建的な勢力のことである。そして、実践によってえた経験によれば、中国共産党のこの方針は中国革命の状況に適しており、正しいものであることが証明された。

事実はつねにこうである。教条主義は頭をつかいたがらない怠けものによろこばれるだけであって、それは革命にとり、人民にとり、マルクス・レーニン主義にとり百害あって一利ないものである。人民大衆の自覚をたかめ、人民大衆のはつらつとした創造的精神をはげまし、実際活動と理論活動の急速な発展をうながすなどの点からいって、教条主義の迷信をうちやぶり、これをとりのぞくことは、いまもなお必要なことである。

プロレタリアート独裁（中国では労働者階級の指導する人民民主主義独裁である）は、いまや地球上九億の人口を擁する地域で、偉大な勝利をかちとっている。ソ同盟でも中国でも、その他の人民民主主義諸国でも、みなそれぞれに成功した経験と誤りをおかした経験をもっている。わ

NB

誤りの処理のしかた——全国的な長期にわたる誤りにしないこと。

れわれは、ひきつづきこれらの経験を総結しなければならない。われわれは、こんごもやはり誤りを犯すかもしれないということについて、警戒心をもたなければならない。重要な教訓は、わが党の指導機関が誤りを個々の、局部的な、一時的な範囲内にとどめ、個々の、局部的な、またはあらわれたばかりの誤りを全国的な、あるいは長期にわたる誤りにしないようにすべきだ、ということである。

中国共産党の歴史には、かつて数回にわたって重大な誤りをおかした経験がある。一九二四年から一九二七年にいたる革命の時期には、陳独秀を代表者とする右翼日和見主義の誤った路線がわが党内にあらわれた。一九二七年から一九三六年にいたる革命の時期には、三回にわたって「左翼」日和見主義の誤った路線がわが党内にあらわれた。そのなかでもとくに重大だったのは、李立三路線と王明路線であって、前者は一九三〇年に、後者は一九三一年から一九三四年にかけてあらわれたが、革命にもっとも重大な損害を及ぼしたのは王明路線であった。この時期にはさらに、革命のある重要な根拠地で、党の中央委員会に対抗した反党的な張国燾の右翼日和見主義的な誤った路線があらわれ、この誤った路線は革命の重要な勢力の一部にゆゆしい損害をおよぼした。張国燾路線が革命のある重要な根拠地だけでの誤りであったいがいは、うえにのべた二つの時期におかした誤りはすべて全国的な誤りであった。抗日戦争の時期にはまた、王明同志

1924~27

陳独秀

27~36

李立三

王明

張国燾

抗日

王明

1953

高崗

饒漱石

を代表者とする右翼日和見主義の誤った路線がわが党内にあらわれたが、わが党は、それいぜんの二つの革命の時期の教訓をくみとっていたので、この誤った路線の発展をくいとめ、この誤った路線はわりと短い期間のうちにわが党の中央委員会によって是正された。中華人民共和国が誕生していご、一九五三年にはまた高崗、饒漱石の反党同盟がわが党内にあらわれた。この反党同盟は、国内国外の反動勢力を代表し、革命事業に危害をくわえることを目的としていた。もしも党中央委員会がいちはやくこれを発見して、ときをうつさずこの反党同盟をうち破らなかったならば、党と革命の事業のこうむる損失は、計りしれないものがあったであろう。

これによって見てもわかるように、わが党の歴史的経験も、自身がさまざまな誤った路線との闘いをつうじて自己をきたえたからこそ、偉大な革命の勝利と建設の勝利をかちとったのだということを証明している。局部的な誤りや個々の誤りとなると、これは活動のなかでしばしばおこるものであるが、これらの誤りが発展の機会をあたえられず、全国的な、長期にわたる誤りとならず、人民に危害をあたえる大きな誤りとならなかったのは、とりもなおさず党の集団的な知恵と人民大衆の知恵によって、そのつどこれをあばきだし、克服したがためである。

共産党員は、共産主義運動のなかでおこった誤りにたいして、分析的な態度をとらなければならない。スターリンは全面的に誤りをおかしたと考えるものがいるが、それは大へんなまちがい

全面的に分析すること。

スターリン批判の正しい態度

である。スターリンは偉大なマルクス・レーニン主義者であったが、同時にまた、いくつかの重大な誤りを犯しながらその誤りを自覚しないマルクス・レーニン主義者であった。われわれは、歴史的観点にたってスターリンを見、彼の正しい点と誤った点を全面的に、適切に分析し、そのなかから有益な教訓をくみとらなければならない。彼の正しい点も、誤った点も、それはすべて国際共産主義運動のひとつの現象であり、時代の特徴をおびている。全般的にいって、国際共産主義運動はまだ百年とすこしばかりの年月をへてきただけであって、十月革命の勝利をえてからまだ三十九年しかたっていないし、革命活動の多くの面での経験はまだ十分でない。われわれは、偉大な成果をあげているが、やはり欠点や誤りももっている。ひとつの成果をあげればそれにつづいてまたあらたな成果を生みだすように、ひとつの欠点または誤りを克服するとあらたな欠点または誤りがふたたびうまれてくる可能性があり、われわれはそれをまた克服してゆかなければならない。しかし、つねに成果の方が欠点よりも多く、正しいところの方が誤ったところよりも多いのであり、欠点や誤りはつねに克服されるのである。りっぱな指導者とは、誤りを犯さないもののことではなくて、誤りにたいして真剣に対処するもののことである。ひとつも誤りをおかさないような人は、世のなかにあったためしがない。レーニンはつぎのようにのべている。

立派な指導者

「公然と誤りをみとめ、その原因をあばき出し、その誤りを生んだ情勢を分析し、誤りを改める

手段を慎重に討議すること、――これこそ、真剣な政党の目じるしであり、これこそ、その党が自己の義務を遂行することであり、これこそ、階級を、ついでは大衆をも教育し、訓練するゆえんである」と。ソ同盟共産党は、レーニンのこした教えにしたがって、スターリンが社会主義の建設を指導するなかで犯したいくつかの重大な誤りとそれがもたらした結果にたいしていま真剣に対処している。その結果が重大であるからこそ、ソ同盟共産党は、スターリンの偉大な功績を肯定すると同時に、スターリンの犯した誤りの本質をするどくあばきだし、これを戒めとし、こうした誤りがもたらしたよくない結果をだんことして一掃するよう全党によびかけることを必要としているのである。ソ同盟共産党第二十回大会がこのたびおこなったこのするどい批判をつうじて、いくつかの誤った政策のためにこれまでつよく抑えつけられていたあらゆる積極的な要素が全面的に活気づいてくるであろうし、ソ同盟共産党とソ同盟人民がこれまでよりもいっそうかたく団結して、人類がかつてみたことのない偉大な共産主義社会をうちたて、全世界の恒久平和をかちとるために奮闘するであろうことを、われわれ中国共産党員はかたく信ずるものである。

世界のあらゆる反動勢力は、この出来事をあざけり笑っている。彼らは、われわれの陣営が自己の誤りを克服するのをあざけり笑っているのである。こうした嘲笑からはどんな結果が生じる

であろうか？　その結果として、彼らの目のまえに、これまでよりもいっそう強大な、永久にうち破ることのできない、ソ同盟を先頭とする平和と社会主義の偉大な陣営がたちはだかり、そしてあざけり笑うものの人食い事業の方がかえってはなはだ芳しくないことになるのは疑いのないところである。

66.3.21

ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について

1956 12 29

（この文章は『人民日報』編集部が中国共産党中央委員会政治局拡大会議の討議にもとづいて、書いたものである）

一九五六年の四月に、われわれは、スターリン問題と関連して、プロレタリアート独裁の歴史的経験について討議した。そのとき以来、国際共産主義運動のなかで、わが国人民の関心をよびおこした一連の事件がつぎつぎとおこった。チトー同志の十一月十一日の演説と、この演説についての各国共産党の論評がわが国の新聞に発表されてからは、回答を要する多くの問題がふたたび提起された。いまわれわれは、この文章のなかで、つぎのいくつかの問題、第一に、ソ同盟の革命と建設の基本的な道についての評価、第二に、スターリンの功績と誤りについての評価、第三に、教条主義と修正主義にたいする反対、第四に、各国プロレタリアートの国際的団結に重点をおいて討議することにする。

現代の国際問題について検討する場合には、われわれはまず第一に、帝国主義侵略グループと全世界人民の力との対立というこのもっとも基本的な事実から出発しなければならない。帝国主

義の侵略による苦しみをなめつくした中国人民は、帝国主義が一貫して、各国人民の解放とすべての被圧迫民族の独立に反対していること、人民の利益をもっとも頑強に代表する共産主義運動を目の上のこぶとみなしていることを永久に忘れることはない。最初の社会主義国としてソ同盟が誕生していらい、帝国主義は、あらゆる手段をもちいて、ソ同盟に危害をくわえてきた。一連の社会主義国が誕生してからは、社会主義陣営にたいする帝国主義陣営の敵対、社会主義陣営にたいする帝国主義陣営の公然たる破壊活動は、いよいよもって国際政治におけるとくにいちじるしい現象となった。帝国主義陣営のかしらアメリカは、社会主義諸国の内政に干渉することにかけて、とくに凶悪であり破廉恥である。多年にわたり、アメリカは、わが国が自己の領土台湾を解放するのをさまたげてきたし、また東欧諸国を転覆することを公然と政府の政策としてきた。

アメ帝

ハンガリー事件

一九五六年十月のハンガリー事件における帝国主義の活動は、朝鮮侵略戦争いご、社会主義陣営にたいする帝国主義のもっともゆゆしい攻撃であった。ハンガリー社会主義労働者党臨時中央委員会会議の決議がのべているように、ハンガリー事件は内部と外部の幾多の原因によって生じたもので、どのような一面的な解釈も正しくなく、そして、これらの原因のなかでは、国際帝国主義が「主要な、決定的な役割を演じている」のである。ハンガリーにおける反革命の復辟陰謀がうち破られると、アメリカをかしらとする帝国主義者は、一方では国際連合をあやつって、ソ

ダレスの手口

同盟に反対しハンガリーの内政に干渉する決議を採択させ、他方では西方世界の全体にわたって、反共ヒステリーをあおりたてた。アメリカ帝国主義は、英仏のエジプト侵略戦争の失敗を利用して、中東、北アフリカにおける英仏の権益を奪いとろうとやっきになって画策しているが、それでもやはり、英仏との「誤解」をとりのぞき、「いっそう緊密で親しい諒解」をとげることを確約する旨声明し、それによって、共同して共産主義に反対し、アジア、アフリカの人民に反対し、平和を愛する全世界の人民に反対する統一戦線をたてなおそうとしている。共産主義に反対し、人民に反対し、平和に反対するために、帝国主義諸国は団結しなければならない――これがつまり、ダレスが北大西洋条約機構の理事会会議でのべた「世界歴史のこの危機にさいして、生活と行動の哲学をもたなければならない」という言葉の主旨であった。ダレスは、いささか自己陶酔の調子でこう断言した。「ソ同盟の共産党機構はいまや悪化の状態にあり（？）、そして、支配者の権力はまさに崩壊しつつある（？）……こうした情勢をまえにして、自由諸国は、道義の圧力を保持しなければならず、この圧力は、ソ同盟・中国の共産主義体制を破壊するうえに役立ち、軍事的実力と決意を保持するうえに役立つものである」と。彼は北大西洋条約加盟国にたいして、「軍国主義（？）と無神論的イデオロギーに基礎をおくソ同盟の強力な専制政治（？）をくつがえす」ようよびかけ、また、こう考えた。「共産世界の性質をかえることが、い

敵と味方の矛盾

までは可能なようである」！と。

われわれは一貫して、敵がわれわれのいちばんよい先生だと考えてきた。いまダレスがまたわれわれに講義してくれている。彼がどんなにわれわれをそしり、呪おうと、そんなことはいまにはじまったことではない。だが彼が「哲学」のうえから、帝国主義世界にたいし、対共産主義の矛盾を他のすべての矛盾の上におき、すべてを「共産世界の性質をかえ」、ソ同盟を先頭とする社会主義体制を「破壊し」、「くつがえす」ための手段にするよう要求したことは、たとえそれが彼らにとってはっきりと徒労におわるものであっても、われわれにとっては、きわめて有益な教訓である。われわれは、社会主義国と資本主義国が平和に共存し、平和な競争をおこなうことを一貫して主張してきたし、またひきつづき主張しているが、帝国主義者のほうは、やはり、四六時中われわれを滅ぼそうとしているのである。したがってわれわれは、敵とわれわれとのはげしい闘い、つまり世界的な規模をもった階級闘争を、どんなときでも忘れることはできない。

われわれのまえには、性質のちがった二つの矛盾がある。そのひとつは、敵と味方とのあいだの矛盾（帝国主義陣営と社会主義陣営とのあいだの、帝国主義と全世界人民および被圧迫民族とのあいだの、帝国主義国のブルジョアジーとプロレタリアートとのあいだの矛盾等々）である。これは根本的な矛盾であり、その基礎をなすものは、敵対する階級間の利害の衝突である。いま

人民内部の矛盾

人民内部の矛盾 → 敵味方の矛盾

ひとつは、人民内部の矛盾（ある一部の人民と他の一部の人民とのあいだの、共産党内のある一部の同志と他の一部の同志とのあいだの、社会主義国の政府と人民とのあいだの、社会主義国相互のあいだの、共産党と共産党のあいだの矛盾等々）である。これは根本的な矛盾ではなく、階級的利害の根本的な衝突によるのでなしに、正しい意見と間違った意見との矛盾、あるいは局部的な利害の矛盾から生じたものである。この矛盾の解決は、なによりもまず敵にたいする闘争の全体的な利益にしたがわなければならない。人民内部の矛盾は、団結の願望から出発し、批判もしくは闘争をつうじて解決することができるし、またそうすべきであり、それによって、新しい条件のもとで、新しい団結をかちとるのである。もちろん、実際生活の状況は複雑である。ときには、主要な共同の敵にたちむかうために、根本的に利害の衝突する階級も連合することがありうる。それとは逆に、特殊な状況のもとでは、人民内部のある種の矛盾は、その矛盾の一方がしだいに敵のがわに転じてゆくことによって、これまたしだいに対抗的な矛盾に転化してゆくこともありうる。そして最後には、こうした矛盾もまったく質的な変化をとげ、人民内部の矛盾の域を脱して敵味方のあいだの矛盾の一部になる。こうした現象は、ソ同盟共産党の歴史にも、中国共産党の歴史にもひとしくみられるところである。これを要するに、人民の立場に立つほどの者は、けっして人民内部の矛盾を敵味方のあいだの矛盾と同一視したり混同したりすべきではな

く、まして、人民内部の矛盾を敵味方のあいだの矛盾の上におくようなことは、なおさらすべきではない。階級闘争を否定し、敵と味方を区別しない者は、だんじて共産主義者ではなく、マルクス・レーニン主義者ではない。

これから討議しようとする問題にはいってゆくまえに、われわれはまずこの根本的な立場の問題を解決しておかなければならないとかんがえる。それでなければ、われわれはかならず方向を見失い、国際的な諸現象について正しい解釈ができなくなるにちがいない。

一　十月革命の道

国際共産主義運動にたいする帝国主義者の攻撃は、長い間、主としてソ同盟に集中されてきた。また、最近の国際共産主義運動における論争も、ほとんどぜんぶソ同盟についての認識とつながりをもっている。したがって、ソ同盟の革命と建設の基本的な道について正しく評価することは、マルクス・レーニン主義者のこたえなければならない重要な問題のひとつである。

プロレタリア革命とプロレタリアート独裁についてのマルクス主義の学説は、労働運動の経験を科学的に総括したものである。だがマルクスとエンゲルスは、わずか七十二日間のパリ・コンミューンをのぞいては、彼らが生涯の努力をかたむけたプロレタリア革命とプロレタリアート独

裁の実現をその目でみることができなかった。ロシアのプロレタリアートはレーニンとソ同盟共産党の指導のもとに、一九一七年、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁を実現することに成功し、つづいて社会主義社会を建設することに成功した。このときいらい、科学的社会主義は、理論と理想から生きた現実にかわった。こうして、一九一七年のロシア十月革命は、共産主義運動の歴史に新しい時代をきりひらいただけでなく、全人類の歴史に新しい時代をきりひらいた。

革命後の三十九年間に、ソ同盟は巨大な成果をおさめた。搾取制度がなくなるとともに、ソ同盟では、経済生活における無政府状態、恐慌、失業が跡を絶った。ソ同盟の経済と文化は、資本主義国のおよびもつかない速度で発展している。ソ同盟の工業総生産高は、一九五六年には、革命前の最高を記録した一九一三年の三〇倍にたっした。革命前は、工業のたちおくれた、文盲の多い国であったのが、いまでは世界第二の大工業国となり、世界的にすすんだ科学・技術陣と高度に発展した社会主義文化をもっている。ソ同盟の勤労人民は、革命前の被圧迫者から国家と社会の主人公にかわり、革命闘争と建設のいとなみのなかで、ひじょうに大きな積極性と創意性を発揮し、彼らの物質生活と文化生活は根本的に面目をあらためた。十月革命前のロシアは、国内各民族の牢獄であったが、十月革命以後は、各民族とも平等の地位をえ、急速に社会主義の先進

民族にまで成長した。

ソ同盟の発展は、けっして順風に帆をあげたものではなかった。一九一八年から一九二〇年にかけて、ソ同盟は、一四の資本主義国から攻撃をうけた。最初のころのソ同盟は、国内戦争、飢饉、経済的困難、党内における分派の分裂活動といったはげしい苦難の道をたどった。第二次世界大戦の決定的な時期に、西方諸国が第二戦線を展開するまで、ソ同盟は、ヒトラーとその仲間の数百万にのぼる軍隊の攻撃に独力で対抗し、これをうち破った。こうしたきびしい試練も、ソ同盟をおしつぶすことはできなかったし、その前進をはばむことはできなかった。

ソ同盟の存在は、帝国主義の支配を根本からゆりうごかし、すべての革命的労働運動と被圧迫民族の解放運動にかぎりない希望と確信と勇気をあたえてきた。各国の勤労人民はソ同盟を援助し、ソ同盟もまた各国の勤労人民に援助をあたえてきた。ソ同盟は、世界平和の擁護、各民族一律平等の承認、帝国主義侵略反対の外交政策を実行してきた。ソ同盟は、世界的な規模においてファシストの侵略にうち勝った主力であった。英雄的なソ同盟軍隊は、関係諸国の人民と力をあわせて、東欧諸国と中欧の一部、中国の東北部および朝鮮の北部を解放した。ソ同盟は人民民主主義諸国と友好関係をうちたて、これらの国々の経済建設を助け、またこれらの国々とともに、世界平和の強大なとりで――社会主義陣営をかたちづくった。全世界被圧迫民族の独立運動、世

界人民の平和運動、第二次世界大戦後に生まれたアジア、アフリカ地域の多くの平和をのぞむ国々にたいしても、ソ同盟は大きな支持をあたえた。

いじょうのべたところは、すべて、争う余地のない事実であり、周知のことがらである。こうしたことを、なぜいまさらとりあげるのか？　それは、共産主義の敵がこれらすべてのことがらを一貫して抹殺するのはさもあるべきこととして現在共産主義者のなかにも、ソ同盟の経験について検討するさい、往々にして物事の第二義的な面に注意を集中し、第一義的な面をみわすれているものがあるからである。

ソ同盟の革命と建設にかんする経験には、その国際的な意義からいって、いくつかのことなった面がある。ソ同盟の成功した経験のなかにはいちぶに基本的な性質をもったものがあり、それは人類歴史の現段階において普遍的な意義をもっている。これがソ同盟の経験のなかのおもなそして基本的な面である。他のいちぶのものは、こうした普遍的な意義をもっていない。そのほかに、ソ同盟は、誤りと失敗の経験ももっている。誤りと失敗は、それぞれの形や程度のうえの違いこそあれ、いかなる国、いかなる時期においても完全には避けえられないものである。しかもソ同盟は、最初の社会主義国であるところから、自分の手本とすべき成功した経験というものがなく、いくつかの誤りや失敗もこれを避けるのがなおさら困難な事情にあった。これらの誤りや

基本的な経験

失敗は、すべての共産主義者にとって、きわめて有益な教訓である。したがってソ同盟のすべての経験は、いくつかの誤りや失敗の経験をもふくめて、われわれの真剣な研究に値いするものであり、その成功した基本的経験はとりわけ重要である。ソ同盟の発展というこの事実は、ソ同盟の革命と建設の基本的経験が偉大な成功であり、マルクス・レーニン主義の人類史上における最初の天にこだまする高らかな凱歌であることを証明するものである。

ソ同盟の革命と建設の基本的経験とはなにか？　われわれのみるところでは、少なくともつぎのいくつかの経験は基本的な性質をもっている。

（1）プロレタリアートの進んだ人びとによって共産主義の政党が結成される。この政党は、マルクス・レーニン主義を自己の行動の指針とし、民主主義的中央集権制にもとづいてうちたてられ、大衆としっかり結びつき、勤労大衆の中心になるよう努力し、また、マルクス・レーニン主義によって自己の党員と人民大衆を教育する。

（2）プロレタリアートは、共産党の指導のもとに、勤労人民と連合し、革命闘争をつうじて、ブルジョアジーの手から権力をかくとくする。

（3）革命に勝利してからは、プロレタリアートは、共産党の指導のもとに、労農同盟を基礎として、広はんな人民大衆と連合し、プロレタリアートの地主、ブルジョアジーにたいする独裁をうちたて、反革命分子の反抗を鎮圧し、工業の国有化を実現し、農業の集団化を一歩一歩実現し、それによって搾取制度と生産手段の私有をなくし、階級をなくする。

（4）プロレタリアートと共産党の指導する国家は、人民大衆をみちびいて、社会主義経済と社会主義文化を計画的に発展させ、これを土台として、人民の生活水準をしだいに向上させ、また、積極的に条件をととのえ、共産主義社会に移ってゆくために奮闘する。

（5）プロレタリアートと共産党の指導する国家は、だんことして帝国主義の侵略に反対し、諸民族の平等をみとめ、世界の平和をまもり、プロレタリア国際主義の原則を堅持し、また、各国勤労人民の援助をうるために努力するとともに、各国勤労人民と被圧迫民族を援助するために努力する。

「十月革命の道」は普遍的

われわれが一般的にいっている十月革命の道とは、それぞれの時期、場所でしめされた具体的な形を別にしていえば、とりもなおさずここにあげたいくつかの基本的なもののことである。これらの基本的なものは、いずれも、世界のどこにでも通用するマルクス・レーニン主義の普遍的真理である。

それぞれの国の革命と建設の過程は、共通の面のほかに、ことなった面をもっている。そういう意味からいうと、すべての国は、みなそれぞれに具体的な発展の道をもっている。この問題に

ついては、われわれはあとでとりあげることにする。しかし、根本原理のうえからいうならば、十月革命の道は、人類社会発展の長い途上の特定の段階における革命と建設についての普遍的な法則を映し出している。これは、ソ同盟のプロレタリアートの大道であるばかりでなく、各国のプロレタリアートが、勝利をかちとるためには、どうしても歩まねばならない共通の大道である。中国共産党中央委員会が、党の第八回全国代表大会における政治報告のなかで、「わが国の革命には独自の特徴がたくさんあるが、中国共産党員はやはりじぶんのおこなっている事業を偉大な十月革命の継続であるとみなしている」とのべたのは、ほかならぬこのためである。

十月革命がきりひらいたこのマルクス・レーニン主義の道をまもることは、目下の国際情勢のもとにおいては、とくに大きな意義がある。帝国主義者は「共産世界の性質をかえる」といっているが、彼らがかえようとしているのはほかならぬこの革命の道なのである。数十年らい、あらゆる修正主義者がマルクス・レーニン主義にたいして持ち出した修正意見、彼らのふりまいた右翼日和見主義の思想もまた、まさに、プロレタリアート解放のたどるべきこの道をさけようするものにほかならなかった。すべての共産主義者の任務とは、すなわち、プロレタリアートを結集し、人民大衆を結集し、社会主義世界にたいする帝国主義者の狂気じみた攻撃をだんことしてしりぞけ、あくまでも十月革命がきりひらいた道にそってすすむことである。

二

ソ同盟の革命と建設の基本的な道が正しいものである以上、なぜスターリンの誤りが生まれたか、という疑問をいだく人がある。

この問題については、われわれはすでに四月の文章（「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」を指す――外文出版社注）のなかで討議ずみである。だが、最近の東欧の情勢やこれに関係のあるその他の情勢の発展からみて、スターリンの誤りについて正しく認識し、正しく対処することは、多くの国々の共産党内部の発展や各国共産党相互の団結に影響をおよぼす重大な問題となっており、全世界の共産主義隊伍の帝国主義にたいする共同闘争に影響をもたらす重大な問題となっている。したがって、この問題については、われわれの見解をもすこしつっこんでのべる必要がある。

ソ同盟の発展と国際共産主義運動の発展のうえで、スターリンは偉大な功績をのこした。われわれは、「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」のなかでつぎのようにのべた。「レーニンの死後、党と国家のおもな指導的人物としてのスターリンは、マルクス・レーニン主義を創造的に運用し発展させた。そして、レーニン主義の遺産をまもり、レーニン主義の敵――トロツ

キストやジノヴィエフ一味、その他ブルジョアジーの代理人に反対する闘いのなかで、彼は人民の意志と願望とを示したのであり、傑出したマルクス・レーニン主義の闘士としての名にそむかなかった。スターリンが、ソ同盟人民の支持をえ、歴史上で重要な役割をはたすことができたのは、まず第一に、彼がソ同盟共産党のその他の指導者といっしょになってソビエト国家の工業化と農業集団化についてのレーニンの路線をまもったがためであった。ソ同盟共産党は、この路線を実行にうつして、ソ同盟において社会主義制度の勝利をもたらすとともに、ヒトラーに反対する戦争でソ同盟が勝利をかちとる条件をつくりだした。そして、ソ同盟人民のこれら一切の勝利は、全世界の労働者階級とすべての進歩的な人びとの利益に合致するものであった。そのために、スターリンというこの名も、おのずから全世界できわめて高い栄誉をになうようになった」

しかしスターリンは、ソ同盟の対内対外政策のいずれの面でも、いくつかの重大な誤りをおかした。個人の専断というスターリンの仕事のやり方は、ソ同盟の党の生活と国家制度における民主主義的中央集権制の原則をある程度そこない、社会主義的法制の一部を破壊した。多くの仕事のうえでスターリンがひどく大衆からはなれ、個人の専断で多くの重大政策をとりきめたことから、重大な誤りが避けられなくなったのである。こうした誤りは、反革命の粛清や、ある国々との関係のうえにとくにはっきりとあらわれている。スターリンは、反革命の粛清において、一

粛清における誤

兄弟国や兄弟党に対する誤

方では、処罰すべききわめて多くの反革命分子を処罰して、この戦線での任務を基本的になしとげたが、他方では、多くの忠実な共産主義者と善良な公民に無実の罪をきせ、重大な損失をまねいた。兄弟国や兄弟党にたいしては、スターリンは全般的にいって国際主義の立場にたち、各国人民の闘争と社会主義陣営の発展に援助をあたえた。だが、ある具体的な諸問題の処理にさいしては、彼は大国的排外主義の傾向をしめし、平等の精神にかけ、まして、広はんな幹部を謙虚な態度をとるよう教育する点では、いっそう欠けていた。ときには、間違いもはなはだしく、一部の兄弟国や兄弟党の内部問題にまで干渉して、多くのゆゆしい結果をまねいたのであった。

こうしたスターリンの重大な誤りは、どのように解釈すべきであろうか？　これらの誤りとソ同盟の社会主義制度との関係はどうなのか？

マルクス・レーニン主義的弁証法の科学は、どのような生産関係も、そしてその生産関係の土台のうえにたつ上部構造も、すべて発生と発展と消滅の過程をもっていることをおしえている。生産力が一定の段階にまで発展すると、ふるい生産関係はもはや基本的にこれに適応できなくなり、また経済的土台が一定の段階にまで発展すると、ふるい上部構造はもはや基本的にこれに適応できなくなる。そのようなときには、根本的な性質をもった変革が必然的におこってくる。こうした変革にさからおうとするものは、誰であろうと、歴史から見捨てられる。この法則は、い

ろいろな形ですべての社会に適用される。すなわち、いまの社会主義社会にも将来の共産主義社会にも適用されるのである。

スターリンの誤りは、ソ同盟の社会主義経済制度と社会主義政治制度がすでに過去のものとなり、ソ同盟の発展の需要に適応しなくなったところからきたものではないのか？ もちろんそうではない。ソ同盟というこの社会主義社会はまだ若く、うまれてからまだ四十年にみたない。ソ同盟の経済が急速な発展をとげたという事実は、ソ同盟の経済制度が生産力の発展に基本的に適応したものであり、ソ同盟の政治制度もまた経済的土台の需要に基本的に適応したものであることを証明している。スターリンの誤りはけっして社会制度に起因するものではなく、これらの誤りを是正するために、社会主義制度を「是正する」必要はもちろんない。西方のブルジョアジーは、スターリンの誤りをとりあげて、社会主義制度の「誤り」を証明しようとしているが、それはぜんぜん根拠のないことである。他のいちぶの者は、経済事業にたいする社会主義的国家権力の管理をとりあげてスターリンの誤りを説明しようとし、政府が経済事業を管理すれば、かならず社会主義の力の発展をさまたげる「官僚主義機構」になると考えているが、これまた人を納得さすべくもない。ソ同盟経済の大きな高まりは、とりもなおさず勤労人民の国家権力が計画的に経済事業を管理した結果によるものであって、スターリンのおかしたおもな誤りが、経済を管理

社会制度に起因しない

する国家機関の欠点とほとんど関係のないことは誰しも否定できないことである。

しかし、基本的制度が需要に適応している状態にあっても、生産関係と生産力のあいだ、上部構造と経済的土台のあいだには、やはり一定の矛盾が存在している。この種の矛盾は、経済制度と政治制度のいくつかの環節のうえの欠陥としてあらわれてくる。この種の矛盾は、根本的な性質をもった変革によって解放する必要はないとはいえ、やはりそのつど調整してゆく必要がある。

需要に適応する基本的な制度があり、制度のなかの日常的な性質の矛盾（弁証法によれば、「量的変化」の段階にある矛盾）も調整されておれば、誤りはおこらずにすむかどうか？ 問題はそれほど簡単ではない。制度は決定的なものではあるが、制度それ自身はけっして万能ではない。どんなによい制度であっても、仕事のうえで重大な誤りをおかさないよう保証できるものではない。正しい制度があれば、それからの問題は、主として、この制度を正しく運用できるかどうか、正しい政策、正しい活動の方法や作風があるかどうかということになる。そうしたものがなければ、正しい制度のもとでもやはり重大な誤りをおかすおそれがあるし、りっぱな国家機関を運用して、けっしてりっぱといえないことをしでかすおそれがあるのである。

いじょうのべたこれらの問題は、経験の積みかさねと実践の試練によって解決すべきであっ

制度は万能ではない

↳実験の積みかさねと実践の試練によって解決すべきだ

党と国家の任務

で、おいそれと解決できるものではない。そのうえ、状況はたえず変化し、ふるい問題が解決されると、あらたな問題がまた生まれてくるといった工合で、いっぺんで永久に解決するなどということもありえない。こうした見方からすれば、すでに強固な土台をうち固めた社会主義国においても、生産関係や上部構造のあるいくつかの環節にまだ欠陥があり、党と国家の政策、活動の方法や作風にまだあれこれのかたよりがあることは、すこしも不思議ではない。

社会主義国にあっては、党と国家の任務は、大衆と集団の力にたよって、経済制度と政治制度のそれぞれの環節を随時調節し、活動のうえの誤りをいちはやく発見し是正することにある。もちろん党や国家の指導者たちの見解が、いつでも客観的な実際と一〇〇パーセント一致しうるというようなことはない。したがって、彼らはその活動においていっぱんに個々の、局部的な、一時的な誤りを避けることができない。とはいえ、マルクス・レーニン主義の弁証法的唯物論の科学を厳格にまもり、懸命にそれを発展させてゆくかぎり、党と国家の民主主義的中央集権制をどこまでもまもってゆくかぎり、真剣に大衆にたよってゆくかぎり、全国的な、長期にわたる、重大な誤りは避けることができるのである。

全国的長期の誤りは避けることができる

スターリンの後年におけるいくつかの誤りが全国的な、長期にわたる、重大な誤りにまで発展し、いちはやくこれを是正しえなかったのは、彼が一定の範囲と程度において大衆と集団から離

スターリンの誤りの社会的歴史的条件

れ去り、党と国家の民主主義的中央集権制を破壊したためにほかならない。党と国家の民主主義的中央集権制がある種の破壊をうけたについては、一定の社会的、歴史的な条件があった。すなわち、国家を指導する面の経験が党に欠けていたこと、新しい制度がふるい時代の影響によるあらゆる侵蝕に抵抗しうる程度にまだうちかためられていなかったこと（新しい制度がかためられてゆく過程とふるい影響がなくなってゆく過程は、いずれも直線的でなく、そのなかの波状的な起伏現象は、歴史の転換期にはしばしばみられる）、国内国外の緊迫した闘争が民主主義のある種の発展に制約をくわえたこと等々がそれである。しかし、こうした客観的な条件だけでは、誤りをおかす可能性はかならずしも現実のものとはならない。スターリンのおかれていた環境よりもずっと複雑で困難な条件のもとにあったにもかかわらず、レーニンはスターリンのような誤りをおかさなかった。ここでは、決定的な要因となるものは、その人の思想状況である。スターリンは、後年、一連の勝利と礼讃にのぼせてしまい、彼の思想方法は部分的にではあるが、弁証法的唯物論からひどくかけはなれて、主観主義におちいった。彼は、個人の知恵や権威を盲信するようになると、さまざまな複雑な実際状況をまじめに調査研究しようとせず、同志たちの意見や大衆の声にまじめに耳をかたむけようとしなくなった。そのために、自分の決定した政策や措置も、往々にして客観的な実際状況に反するものになった。そのうえ、彼は、とかく長い期間にわ

思想状況が決定的要因

だってそうした誤りを固執しつづけ、自分の誤りをいちはやくあらためることができなかった。

スターリンの誤りを是正し、これらの誤りがもたらしたものを取り除くために、ソ同盟共産党はすでに対策をこうじ、そして成果をあげはじめている。ソ同盟共産党第二十回大会は、スターリンについての迷信をうち破り、スターリンの誤りの重大性を暴露し、スターリンの誤りがもたらしたものを取り除く面で、大きな決意と勇気をしめした。全世界のマルクス・レーニン主義者と共産主義事業の同情者はみな、誤りを是正するソ同盟共産党の努力を支持し、ソ同盟の同志の努力が完全な成功をおさめるようのぞんでいる。スターリンの誤りが短期間の誤りでなかっただけに、この誤りの是正が、早急に完全な成功をおさめえないのは、あきらかである。これには、相当長い期間の努力が必要であり、念のいった思想教育が必要である。われわれは、かつて無数の困難をきりぬけた偉大なソ同盟共産党が、かならずやこれらの困難を克服して、その目的をはたすことを信じている。

このような誤りを是正するソ同盟共産党の闘争が、西方のブルジョアジーや右翼社会民主党のがわから支持されるはずはない。彼らは、この機に乗じて、スターリンの正しい面を抹殺し、ソ同盟と全社会主義陣営のこれまでの大きな成果を抹殺するために、また、この機に乗じて、共産主義の隊伍のなかに混乱と分裂をつくり出すために、スターリンの誤りの是正をいわゆる「スタ

現代修正主義の現れ

ーリン主義」にたいする反対、「スターリン主義者」にたいする「反スターリン主義者」の闘争だとこじつけている。彼らの悪意は見えすいている。不幸にして、一部の共産主義者もこれに類したことを言いふらしている。われわれは、共産主義者がこうした言い方をするのはきわめて有害だとおもう。

スターリンはその後年に、いくつかの重大な誤りをおかしてはいるが、彼の生涯がマルクス・レーニン主義の偉大な革命家としての生涯であったことは周知のとおりである。スターリンは、青年時代には、ツァーリズムに反対し、マルクス・レーニン主義をひろめるために闘い、党中央の指導機関にはいってからは、一九一七年の革命を準備するために闘い、十月革命以後は、十月革命の成果をまもるために闘い、レーニン死後の約三十年間は、社会主義をうちたて、社会主義の祖国をまもり、世界の共産主義運動を発展させるために闘った。全体からいって、スターリンはつねに歴史の流れの先頭に立って闘争を指導したのであって、彼は妥協することを知らぬ帝国主義の敵であった。彼は、誤りをおかしたときでさえも、それが勤労者の利益を敵の侵害からまもるために必要だと信じていたのであって、彼の悲劇もそこにあった。いずれにせよ、スターリンの誤りは、本来さけることのできる損害をソ同盟にもたらしたとはいえ、スターリンが指導した時期に、社会主義のソ同盟はやはり大きな発展をとげた。この否定することのできない事実

スタの悲劇

スタの誤りにもかかわらずソ同盟の発展

全面的にみること

「スタ主義」という場合

誤りは二義的

は、社会主義制度の力づよさを物語っているだけでなく、スターリンがなんといっても志操堅固の共産主義者だったことを物語っている。したがって、スターリンの思想と活動のすべてを総括するさいには、われわれは彼の肯定的な面と否定的な面、功績と誤りとをあわせて見るようにしなければならない。問題を全面的に見るかぎり、たとえ「スターリン主義」といったような言葉をつかわなければならないとしても、その場合いえることは、ただ、「スターリン主義」とは、まず第一に、共産主義のことであり、マルクス・レーニン主義のことであって、これが主要な面であり、つぎに、「スターリン主義」には、いくつかの重大な、徹底的に是正しなければならない、マルクス・レーニン主義に反した誤りがあるということ、これである。これらの誤りを是正するために、ある時期これを強調することは必要であるにせよ、正しい評価をあたえて、誤解をまねかないようにするためには、これらの誤りを正当な位置におくことも、これまた必要なことである。われわれは、スターリンの誤りは、その功績とくらべて、第二義的なものにすぎないと考えるものである。

客観的な分析の態度をとることによって、はじめて、われわれは、スターリンや彼の影響のもとに似たような誤りをおかしたすべての同志に正しく対処することができ、彼らの誤りを正しく処理することができるのである。彼らの誤りは、共産主義者の活動のうえでおかされた誤りである以上、これは、共産主義隊伍の内部における是非の問題であって、階級闘争における敵味方の問題ではない。したがって、われわれは、同志としての態度で彼らにあたるべきで、敵にたいする態度であたるべきではないし、また彼らの誤った面を批判するとともに、彼らの正しい面をまもるべきで、彼らのすべてを否定すべきではない。

すべてを否定すべきでない。

誤りから教訓を

彼らの誤りに社会的、歴史的な背景があり、とくに、思想・認識のうえの根源がある。こうした誤りは、たまたま彼らのあいだでおこりはしたが、他の同志のあいだでもおこる可能性はあるのである。したがって、彼らの誤りを知り、これを是正したのちにあっては、こうした誤りを大きな教訓とかんがえ、活用できる財産とみなし、これでもってすべての共産主義者の自覚を高めて、こうした誤りのくりかえしをふせぐとともに、共産主義事業の発展を促進することが必要である。そうでなく、誤りをおかしたこれらの人びとにたいし、一切を否定する態度でのぞみ、彼らをなんとか主義者、かんとか主義者とよんで、差別扱いしたり敵視したりするならば、自分たちの同志は、とうぜん汲みとるべき教訓をも汲みとらせない結果になるばかりか、是非と敵味方というこの二つの性質のことなった矛盾を混同させることによって、客観的には、敵が共産主義の隊伍に反対し、共産主義の陣地をくずすのを助けることになるのは必至である。

チトー同志とユーゴスラビア共産主義者同盟の他の指導的同志が、最近の発言のなかで、スタ

ーリンの誤りやこれに関係あるその他の問題についてしめした態度は、われわれの見るところでは、全面的であり客観的であるとは考えられない。ユーゴスラビアの同志たちがスターリンの誤りに特殊な反感をいだいているのは、理解できることである。ユーゴスラビアの同志たちは、一時期、困難な条件のもとであくまで社会主義をまもる貴い努力をはらった。彼らが企業やその他の社会組織のなかで民主的管理の試みを実施していることも、人びとの注意をひいている。中国人民は、ソ同盟その他の社会主義国がユーゴスラビアと和解したことをよろこび、中国とユーゴスラビア両国が友好関係をうちたて、発展させていることをよろこびむかえると同時に、ユーゴスラビアが社会主義の道にそって日増しに繁栄し強大になることを、ユーゴスラビアの人民とおなじように望んでいる。チトー同志のこんどの演説のなかのいくつかの論点、たとえば、ハンガリーの反革命分子にたいする非難、ハンガリー労農革命政府にたいする支持、イギリス、フランス、イスラエル三国のエジプト侵略にたいする非難、フランス社会党の侵略政策採用にたいする非難には、われわれも同意である。だが、われわれの不審にたえないのは、彼が演説のなかで、ほとんどすべての社会主義国と多くの共産党を攻撃したことである。チトー同志は、「頑冥なスターリン主義者たちは……各国の党内で、いまだになんとかしてその地位を保っており、彼らは自分たちの支配をかためで、こうしたスターリン主義問題の傾向を自国民ばかりか他国民にまでお

しつけようと、またもや望んでいるのである」と断定している。そして、そこから彼はこう言っている。「われわれは、ポーランドの同志たちとともに、その他の国の——東方の国であると西方の国であるとをとわず——党内にあらわれたそうした傾向と闘わなければならない」と。われわれは、ポーランドの党の指導的な同志たちが、兄弟党にたいし、こうした敵対的な態度をとらねばならないというような発言をしたことをまだ耳にしていない。チトー同志のこうした意見にたいしては、われわれはこう言わなくてはならないとおもっている。つまり、彼はいわゆる「スターリン主義」、「スターリン主義者」等々を攻撃の対象とし、また、現在の問題は、「ユーゴスラビアではじめた」路線と、いわゆる「スターリン主義の路線」と、そのいずれが勝つかの問題だというふうに考えているが、こうした態度は正しくない、ということである。これは共産主義運動を分裂にみちびくだけのものである。

チトー同志は、「こんご社会主義にむかうかそれとも反革命にむかうかというこの角度から現在のハンガリー情勢をみるとき、われわれはどうしてもカダル現政府をまもり、これを助けなければならない」と正しく指摘した。しかし、ユーゴスラビア連邦人民議会で、ユーゴスラビア連邦行政会議副議長のカルデリ同志がハンガリー問題についておこなった長い演説は、ハンガリー政府をまもり、援助するものとはいい難い。彼の演説は、ハンガリー事件について、まったく敵

カルデリの誤スタ路線の本質

味方を区別しない解釈をくだしたばかりでなく、ハンガリーの同志たちに政治制度を根本からあらためなければならない」と要求したり、「労働者評議会がどのようなものになろうとも」、ブダペストその他の地域的な労働者評議会にすべての権力をひきわたすことを要求したり、また「大衆からいえば、そうした党は官僚独裁の化身だから」、「共産党を復活させることに無駄骨を折る必要はない」と要求したりした。これが、カルデリ同志が兄弟国のために案出した「非スターリン主義路線」の見本である。ハンガリーの同志たちは、カルデリ同志のこの提案を拒絶した。彼らは、反革命分子にあやつられていたブダペストその他の地域的な労働者評議会を解散させ、だんことして社会主義労働者党を発展させた。われわれは、ハンガリーの同志たちのやり方が完全に正しいものであり、そうしなかったら、ハンガリーの将来は社会主義ではなくて、反革命になるにちがいないと考えるものである。

ユーゴスラビアの同志たちのやり方は、あきらかに行き過ぎである。兄弟党にたいする彼らの批判のなかには、たとえ部分的に合理的なところがあるにせよ、彼らのとっている基本的な立場と方法は、いずれも、同志的に討議するという原則に反している。われわれは、ユーゴスラビアの内部問題に口出ししようとはおもわないが、ここでのべたことはけっして内部問題ではない。国際共産主義の隊伍の団結をかためるために、われわれの隊伍のなかに混乱と分裂をつくりだすような条件を敵にあたえないために、われわれはユーゴスラビアの同志たちに兄弟としての勧告をしないわけにゆかないのである。

三

教条主義の発展

修正主義が生まれて

スターリンの誤りのもたらしたゆゆしい結果のひとつは、教条主義の発展である。各国共産党の隊伍は、スターリンの誤りを批判するとともに、教条主義克服の闘争をくりひろげた。この闘争は、まったく必要である。しかし、一部の共産主義者は、スターリンにたいして一切を否定する態度をとり、「スターリン主義」に反対するという誤ったスローガンをかかげたため、マルクス・レーニン主義にたいする修正主義思潮の発展を助けることになった。この修正主義の思潮は、疑いもなく、共産主義運動にたいする帝国主義の攻撃をたすけるものであり、実際に、帝国主義もまたこの思潮を積極的に利用している。われわれは、教条主義にだんことして反対するさい、修正主義にも同時にだんことして反対しなければならない。

マルクス・レーニン主義は、人類社会の発展には、共通の基本法則があるとみている。だが、それぞれの国や民族には、また、千差万別の特徴がある。したがって、どの民族もすべて階級闘争の道をたどり、そして最後には、基本的な点では共通していても、具体的な形のうえではそれ

ML の普遍的真理が、その民族的特徴を通じて実際生活のなかに具体的にあらわれる

ぞれに異なった道をとおって、共産主義へと進んでゆくのである。自民族の特徴にもとづいて、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を巧みに応用することによってのみ、どの国のプロレタリアートの事業も、はじめて成功をおさめることができる。そのうえ、このようにやってゆくかぎり、彼らは自分たちの新しい経験をうみ出すこともでき、そのことで、他の民族やマルクス・レーニン主義の宝庫全体に一定の貢献をすることもできるのである。教条主義者は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理が、一定の民族的特徴をつうじてのみ実際生活のなかに具体的にあらわれ、作用する点を理解していない。彼らは自国の、自民族の社会的、歴史的特徴を真剣に研究しようとせず、これらの特徴にもとづいて具体的にマルクス・レーニン主義の普遍的真理を応用しようとしない。したがって彼らは、プロレタリアートの事業を勝利にみちびくこともできないのである。

マルクス・レーニン主義は、各国の労働運動の経験を科学的に総括したものである以上、当然、先進国の経験を応用することを重要視しないわけにはゆかない。レーニンは『なにをなすべきか？』のなかで、こうのべている。「社会民主主義運動は、本質的に国際的である。このことは、われわれが民族的排外主義と闘わねばならないことを意味するだけでなく、若い国にようやくはじまりつつある運動は、ほかの国々の経験を応用してこそはじめて順調に発展できることを

正しい方法でソ連からよいこと

意味するものである」と。ここで、レーニンがのべているのは、ロシアでようやくはじまったばかりの労働運動は、どうしても西欧の労働運動の経験を応用しなければならないということである。彼のこの見方は、若い社会主義国がソ同盟の経験を応用するという問題にも、やはり適用できる。

だが、学ぶには正しい方法がなければならない。ソ同盟のいっさいの経験は、その基本的な経験をもふくめ、すべてが一定の民族的特徴と結びついたものであって、他の国がそのままひき写しすべきものではない。まえにのべたように、ソ同盟の経験のなかには、ほかに、誤りや失敗の部分もある。これらの成功し、また失敗したすべての経験は、これをりっぱに学ぶものにとっては、このうえもない宝である。というのは、それらの経験は、われわれを助けて回り道をすくなくし、損失をすくなくしてくれるからである。それに反し、分析をくわえずにそっくりそのままのひき写しをするなら、ソ同盟で成功した経験でも、他の国では失敗をまねくことがありうるし、失敗した経験ならなおさらいうまでもないことである。さきに引用したことばのすぐあとで、レーニンはこうのべている。「しかし、真によく他国の経験を応用するためには、たんにこうした経験について知ったり、あるいは他国の最近の決議を書き写したりするだけでは不十分である。そのためには、こうした経験を批判的にとりあつかい、それを独自にためしてみる能力を

もつことが必要である。だれでも、現代の労働運動がどんなに大きな発展をとげ、たくさんの枝にわかれたかを考えてみるだけで、この任務を遂行するためにどれほどの理論的力と政治的（ならびに革命的）経験とのたくわえが必要であるかがわかるであろう」と。プロレタリアートが権力をかくとくした国では、レーニンがここでのべているよりも問題がずっと複雑なのはあきらかである。

中国共産党の歴史においては、一九三一年から一九三四年までのあいだ、教条主義者は中国の特徴を否定し、ソ同盟のあるいくつかの経験をそのまま踏襲し、わが国の革命勢力に重大な失敗をなめさせた。この失敗は、わが党に深刻な教訓をあたえた。わが党は、一九三五年の遵義会議から一九四五年の第七回全国代表大会までのあいだに、このひじょうに大きな害をなしていた教条主義の路線をすっかり清算し、誤りをおかした同志をもふくめて全党の同志を団結させ、人民の力をのばして、革命の勝利をかちとった。もしこのようにしなかったならば、勝利をかちとることはできなかったであろう。われわれが教条主義の路線を克服していたので、わが党は、いまソ同盟その他の兄弟国の経験をまなぶさい、比較的に誤りをすくなくすることができたのであるし。また、こうしたことからして、われわれは、いま、ポーランドとハンガリーの同志たちがこれまでの教条主義の誤りを是正することがどんなに必要であり、また困難であるかをよく理解で

ポーランドとハンガリーの教条主義の誤り

スターリンの重大な誤り

→社会主義的民主主義の破壊

きるのである。

教条主義の誤りは、いつ、どこで生じたものであっても、是正されなければならない。われわれは、これからもひきつづき、われわれの活動のうえのそうした誤りを是正し、防止するために努力するであろう。だが、教条主義に反対することと修正主義を容認することのあいだには、なんらの共通点もない。マルクス・レーニン主義は、各国の共産主義運動が必然的にそれぞれの民族的特徴をもつことを承認するが、だからといって、このことはけっして、各国の共産主義運動が基本的な共通点をもたないでもよいとか、マルクス・レーニン主義の普遍的真理から離れてもよいとかという意味ではない。教条主義に反対する今日の潮流のなかには、わが国にも外国にも、ソ同盟の経験のひき写しに反対することに名をかりて、ソ同盟の基本的な経験がもつ国際的な意義を否定したり、マルクス・レーニン主義を創造的に発展させることに名をかりて、マルクス・レーニン主義のもつ普遍的真理としての意義を否定したりするものがいる。

スターリンおよびいくつかの社会主義国のこれまでの指導者が社会主義的民主主義を破壊するという重大な誤りをおかしたことから、共産主義の隊伍のなかの立場のしっかりしていない一部のものは、社会主義的民主主義を発展させることに名をかりて、プロレタリアート独裁をよわめまたは否定し、社会主義国の民主主義的中央集権制をよわめまたは否定し、党の指導的役割をよ

わめまたは否定しようとしている。

プロレタリアート独裁は、反革命勢力にたいする独裁を、もっとも広はんな人民の民主主義すなわち社会主義的民主主義と緊密に結びつけたものでなければならないということは、疑問の余地のないところである。プロレタリアート独裁が強力であり、国内国外の強大な敵にうち勝って、社会主義を実現する偉大な歴史的任務をになうことのできるわけは、ほかでもなくそれが搾取者にたいする勤労大衆の独裁、少数のものにたいする絶対多数のものの独裁だからであり、また、それが広はんな勤労人民にたいし、どのようなブルジョア民主主義も実現することのできない民主主義を実現するからである。広はんな勤労人民との密接なつながりをうしない、彼らの積極的な支持をうしなえば、プロレタリアート独裁などというものはありえないし、すくなくとも強固なプロレタリアート独裁はありえない。階級闘争がはげしくなればなるほど、プロレタリアートはもっとも断固とした、もっとも徹底した態度で広はんな人民大衆にたより、彼らの革命的積極性を発揮させて、反革命勢力にうち勝つことがますます必要となってくる。ソ同盟の十月革命とそれにつづく国内戦争の時期における「わきかえる」ような大衆闘争の経験は、この真理をあますところなく証明している。わが党がつねに口にする「大衆路線」も、当時のソ同盟の経験からまなんだものである。当時のソ同盟のはげしい闘争は、大体において人民大衆の直接行動によって

たっており、もちろんかんぺきな民主的だんどりをふむものではありえなかった。搾取階級がなくなり、反革命勢力がだいたい粛清されたのちも、プロレタリアート独裁は、国内の反革命の残党（こうした残党は帝国主義が存在しているあいだは、完全には粛清することができない）にたいしてやはり必要ではあるが、しかしその矛先は、主として、国外の帝国主義侵略勢力を防御するほうへ転じられなければならない。こうした条件のもとでは、当然、国内の政治生活のなかでしだいに、各種の民主的なやり方を発展させ、健全なものにし、社会主義的法制を健全にし、国家機関にたいする人民の監督をつよめ、国家管理と企業管理における民主的方法を発展させ、国家機関や企業管理機関と広はんな大衆とのつながりを密接にし、こうしたつながりをそこなう障害物をとりのぞき、官僚主義の傾向をさらにすすんで克服すべきであって、スターリンのように、階級がなくなってからも、あいかわらず階級闘争の尖鋭化を強調し、そのために社会主義的民主主義の健全な発展をさまたげるようなことは、してはならないのである。ソ同盟共産党は、この問題についてのスターリンの誤りをだんことして是正したが、これはまったく正しいことであった。

社会主義的民主主義は、どのような意味においても、プロレタリアート独裁と対立することはゆるされないし、ブルジョア民主主義と混同することはゆるされない。政治、経済、文化のいず

社会主義的民主主義の目的はただ一つ

れの分野をとわず、社会主義的民主主義の目的はただひとつ、プロレタリアートと勤労人民全体の社会主義事業をつよめ、社会主義建設にたいする彼らの積極性をのばし、社会主義に反対するあらゆる勢力との闘争にたいする彼らの積極性をのばすことにある。したがって、もしも社会主義に反対する活動に利用されたり、社会主義事業を弱めるために利用されたりするような民主主義があったとしたならば、そうした「民主主義」なるものは、絶対に社会主義的民主主義ではないのである。

修正主義者

だが、いちぶの人は、けっしてこのようには問題をみていない。ハンガリー事件の反響はこのことをもっともはっきりと暴露した。これまでのハンガリーでは、勤労人民の民主的権利がそこなわれ、革命的積極性がくじかれていたが、その反面反革命分子のほうはとうぜんうけるべき打撃をうけていなかったために、反革命分子は一九五六年の十月にやすやすと大衆の不満を利用して、武装反乱を組織することができたのであった。このことは、これまでのハンガリーでは真剣にプロレタリアート独裁がうちたてられていなかったことを物語るものである。しかし、ハンガリーが革命か反革命か、社会主義かファシズムか、平和か戦争かの危機に直面したとき、いちぶの国の共産主義的知識人は問題をどのように提起したか？　彼らは、プロレタリアート独裁実行の問題を提起しなかったばかりか、逆に、ハンガリーの社会主義勢力を援助したソ同盟の正義

ハンガリーにプロレタリア独裁がなかった

の行動に反対し、ハンガリーの反革命を「革命」と称し、反革命分子に「民主主義」をあたえることを労農革命政府にむかって要求したのである！　ある社会主義国のいちぶの新聞は、苦しい条件のもとで勇敢に闘っているハンガリー共産主義者のとった革命的措置を、いまなおはしいままにこきおろしているが、いっぽう全世界の反動派の反共、反人民、平和反対の津波にむかっては、ほとんど口をつぐんでいる。この奇妙な事実はなにを物語っているか？　この事実は、プロレタリアート独裁を離れて民主主義の空論にふけるそうした「社会主義者」が、実際には、ブルジョアジーのがわに立ってプロレタリアートに反対し、資本主義をもとめて社会主義に反対している――彼らの多くはこのことを自覚していないかもしれないが――ことを物語るものである。

レーニンは、プロレタリアート独裁の学説がマルクス主義の眼目であり、プロレタリアート独裁を認めるかどうかというこの点に、「マルクス主義者と凡庸な小ブルジョア（および大ブルジョア）とのもっとも深い相違がある」とくりかえし指摘している。一九一九年のハンガリーのプロレタリア政権にむかって、レーニンは、彼らが「容赦のない、厳格な、すみやかな、だんこたる強力手段をとって」反革命分子を鎮圧することを要求し、さらにつぎのようにいっている。「このことを理解しないものは、革命家ではない。そういうものは、プロレタリアートの指導者または助言者になる資格がない」と。これからみてもわかるように、スターリンが後年に誤りをおか

したのを見、これまでのハンガリーの指導者が誤りをおかしたのを見たからといって、それで、プロレタリアート独裁についてのマルクス・レーニン主義の基本原理を否定し、この基本原理を「スターリン主義」とか「教条主義」とかといってさげすむならば、それはマルクス・レーニン主義を裏切り、プロレタリアートの革命事業から離れた道を歩むことになるのである。

プロレタリアート独裁を否定するものは、社会主義的民主主義が中央集権制を必要とすることをも否定し、社会主義国におけるプロレタリア政党の指導的な役割をも否定する。こうした議論は、むろん、マルクス・レーニン主義者にとって、なにも目新しいものではない。無政府主義者と闘ったさいに、はやくもエンゲルスは、どのような社会組織のなかにおいても、そこに共同行動が存在するかぎり、かならず一定の権威と一定の服従が存在することを指摘している。権威と自治との関係は相対的なものであり、その適用範囲は、社会の発展段階のちがいによって変化する。エンゲルスはつぎのようにのべている。「権威の原理は絶対悪であり、自律の原理は絶対善であると説くのは、ひとつの背理である」と。彼はまた、こうした背理をあくまで固執するものは、実際には「反動につかえる」ものにほかならないといっている。メンシェビキにたいする闘争のなかで、レーニンは、党の組織的指導がプロレタリアートの事業にたいしてもつ決定的な意義について、あますところなくはっきりと指摘した。一九二〇年にドイツの「左翼」共産主義を

権威と服従

権威と自治

スターリンの誤り

批判したさい、レーニンはとくにつぎのように指摘している。党の指導的な役割を否定し、指導者の役割を否定し、規律を否定することは、「プルジョアジーのためにプロレタリアートを完全に武装解除するのと同じである。これは、小ブルジョアの散漫性、動揺性、それから忍耐、団結、秩序ある行動にたいする無能力等々といった俗物根性とそっくり同じものである。こうした俗物根性をはびこらしておくと、かならず、あらゆるプロレタリア革命運動をほろぼすことになるであろう」と。これらの原理はもはや時代おくれのものであろうか？　ある国々の特殊な状況には適用できないものであろうか？　これらの原理を適用するそのために、スターリンの誤りが生まれるのであろうか？　事実はあきらかにそうではない。マルクス・レーニン主義のこれらの原理は、国際共産主義運動と社会主義国家発展の歴史の試練を経てきており、いまにいたるまで、例外といえるような事態にぶつかったためしはないのである。スターリンの誤りは、国家生活における民主主義的中央集権制を実行し、党による指導を実行したことによるものではなくて、ほかでもなく、彼が、一定の範囲と程度において、民主主義的中央集権制を破壊し、党による指導を破壊したことによるものである。国家生活における民主主義的中央集権制を正しく貫徹し、社会主義事業にたいする党の指導を正しく強めてゆくことは、社会主義陣営の各国が、人民を結集し、敵にうち勝ち、困難を克服して大きな発展をかちとるための基本条件である。だから

民主主義的中央集権制の極度と党の指導的役割を守ること

こそ、帝国主義者といっさいの反革命分子は、われわれの事業に打撃をくわえようとしては、つねに、われわれにむかって「自由化」を要求し、また、力を集中してわれわれの事業の指導機関を破壊し、プロレタリアートの中核体としての共産党を破壊しようとするのである。彼らは、党と国家機関の規律がそこなわれたためにこんにち社会主義のある国々にあらわれた「不安定状態」に、このうえない満足の意をしめすとともに、こうした状態を利用して、彼らの破壊活動をつよめている。この事実は、民主主義的中央集権制の権威をまもり、党の指導的役割をまもることが、人民大衆の根本的な利益にたいして、どんなに大きな意義をもつものであるかを物語っている。民主主義的中央集権制における中央集権制は、広はんな民主主義の基礎のうえにうちたてられなければならず、党による指導は、人民大衆としっかり結びついた指導でなければならないということは、疑問の余地のないところである。これらの面に欠点が生じたならば、だんことして批判し、克服しなければならない。だが、これらの欠点にたいする批判は、民主主義的中央集権制をつよめ、党の指導をつよめるためのものであって、だんじて、敵がたくらんでいるような、プロレタリアートの隊伍をしまりのないものにし、混乱させるようなものであってはならない。

修正主義者

教条主義にたいする反対に名をかりて、マルクス・レーニン主義を修正しようとするもののなかには、頭からプロレタリアート独裁とブルジョアジー独裁のけじめを否定し、社会主義制度と資本主義制度のけじめを否定し、社会主義陣営と帝国主義陣営のけじめを否定するものがいる。

帝国主義の破壊工作

彼らの見るところでは、いちぶのブルジョア諸国は、プロレタリアートの党が指導するプロレタリア革命をまつまでもなく、プロレタリアートの党が指導する国家をうちたてるまでもなく、社会主義を建設することができるし、それらの国の国家資本主義はそれ自体がすでに社会主義であり、それどころか、人類社会全体がすでに社会主義に「深くはいりこんでいる」のである。だが、彼らがこうした宣伝にうき身をやつしているちょうどそのときに、帝国主義は、うまれてすでに何年もたっている社会主義国にたいし、動員できるかぎりの軍事、経済、外交、スパイ、「道義」の力を動員して、それらの国々を「破壊し」、「くつがえす」ための準備を積極的にすすめているのである。国内にひそみ、あるいは国外に逃げ出していったこれらの国々のブルジョアジーの反革命分子もまた、やっきになって復辟をはかっている。修正主義の思潮は帝国主義にとっては有利であるが、帝国主義者の行動は修正主義にとってすこしも有利ではなく、かえって修正主義の破産を証明しているようなものである。

四

帝国主義の攻撃に反対するための各国プロレタリアートのもっともさし迫った任務のひとつ

プロレタリアートの国際的団結をつよめること

は、プロレタリアートの国際的団結をつよめることである。帝国主義者と各国の反動派は、共産主義の事業をほろぼそうとする彼らの目的をたっするために、各国人民のあいだに存在している狭い民族感情やある種の民族的へだたりを利用しながら、百方手をつくして、プロレタリアートの国際的団結を破壊しようとしている。確固としたプロレタリアートの革命派は、あくまでこの団結をまもり、この団結を、各国プロレタリアートの共同の利益とみなしている。動揺分子は、この問題についてふらふら動揺し、はっきりした立場というものをもっていない。

共産主義運動は、そもそものはじめから国際的な運動であった。なぜなら、各国のプロレタリアートがともに努力することによってのみ、はじめて、各国ブルジョアジーの共同の圧迫にうちかって、自己の共同の利益を実現することができるからである。共産主義運動におけるこの国際的団結は、各国プロレタリアートの革命事業を発展させるうえに、ひじょうに大きな助けとなった。

ロシア十月革命の勝利は、国際プロレタリア革命運動の新たな発展にとって、巨大な推進力となった。十月革命以後の三十九年間に、国際共産主義運動は、きわめて大きな成果をおさめ、世界的規模において、強大な政治力となった。全世界のプロレタリアートと解放を熱望しているすべての人びとは、人類のかがやかしい前途についてのあらゆる希望をこの運動の勝利のうえに託

している。

これまでの三十九年のあいだ、ソ同盟は、最初に勝利をかちとった社会主義国として、また、社会主義陣営がうまれてからは、この陣営内のもっとも強大な、もっとも経験のゆたかな国として、社会主義諸国と資本主義世界の各国人民にこのうえもない重要な援助をあたえることができたために、つねに国際共産主義運動の中心となってきた。これは、誰かが人為的に決めたというようなものではなく、歴史的条件がおのずからしからしめたものである。各国プロレタリアートの共同の事業の利益のために、アメリカをかしらとする帝国主義陣営の社会主義事業への攻撃にたいし共同で闘うために、社会主義諸国の経済、文化をともに高めてゆくために、われわれは、ひきつづき、ソ同盟を中心とする国際プロレタリアートの団結をつよめてゆかなければならない。

各国共産主義政党のあいだの国際的団結は、人類史上まったく新しい型の関係である。こうした関係の発展過程には、もちろん、困難がないというわけにはゆかない。各国の共産主義政党は、連合しなければならないし、それと同時に、各自の独立をたもたなければならない。この二つの面を正しく統一しないで、どちらかの面をゆるがせにすれば、誤りをおかさないわけにゆかないことを、歴史の経験は証明している。各国共産党のあいだに平等の関係がたもたれ、形式的

民族的利益と国際主義

でない真の話し合いをつうじて、意見と行動の一致がもたらされるならば、その団結はつよまる。それとは反対に、相互の関係において、自己の意見をひとにおしつけたり、あるいはまた、同志的な提案や批判のかわりに、内部問題に干渉しあうといったやり方をするならば、その団結はそこなわれる。社会主義諸国にあっては、共産党が国家生活にたいする指導の責任をになっており、党と党との関係が往々にして国家間の関係や民族間の関係に直接かかわりをもってくるところから、こうした関係の正しい処理は、いっそう慎重にとりくむことを要する問題となってくる。

マルクス・レーニン主義は、プロレタリアートの国際主義を各国人民の愛国主義と結びつけることを一貫して力説してきた。一方においては、各国の共産党は、党員と人民を国際主義の精神で教育しなければならない。なぜなら、各国人民の真の民族的利益は各民族の友好協力をもとめているからである。他方においては、各国の共産党はまた、自国の人民の正当な民族的利益と民族感情の代表者とならなければならない。もともと、共産党員は真の愛国主義者であり、つぎのことをよく知っている。それは、民族の利益と民族感情を正しく代表するときにのみ、はじめて、自国の広ばんな人民からほんとうに信頼され、愛されるということ、人民大衆のなかで、効果的に国際主義の教育をすすめ、各国人民の民族感情や民族的利益を効果的に調和させうるということ、これである。

スタの大国主義的傾向

社会主義諸国の国際主義的団結をかためるために、社会主義諸国の共産党は、相手国の民族的利益と民族感情をたがいに尊重しあわなければならない。大きいほうの国の党の小さいほうの国の党にたいする関係にあっては、この点がとくに重要な意義をもっている。小さいほうの国のがわの反感をまねかないようにするためには、大きいほうの国の党は、平等な態度をとるようたえず注意する必要がある。まったくレーニンのいうとおり、「自覚した各国の共産主義的プロレタリアートは、久しく圧迫をうけてきた国や民族のうちにある民族感情の遺物にたいしては、とくに慎重で注意ぶかくなければならない」のである。

さきにのべたように、スターリンは、兄弟党や兄弟国にたいする関係のうえで、ある種の大国主義的傾向をしめした。こうした傾向の本質は、各国の共産主義政党と、それぞれの社会主義国の、国際的連けいにおける独立、平等の地位を無視する点にあった。こうした傾向には、一定の歴史的原因がある。大国が小国を遇した旧時代のふるくからのならわしも、もちろんまだいくらか影響をのこしているだろうし、ある党またはある国が革命事業でかちとった一連の勝利も優越感のもとにならないとはかぎらないのである。

だからこそ、大国主義の傾向を克服するには、系統的な努力が必要である。大国主義は、けっ

してある一国だけの特有現象ではない。乙の国は甲の国よりも小さく、たちおくれているが、丙の国よりも大きく、すすんでいるといったような場合、この乙の国は、甲の国の大国主義をくさしながら、同時に、丙の国にたいしては、往々大国らしい尊大なかまえをみせるのである。われわれ中国人はわが国が漢、唐、明、清の四代とも大帝国であったことをとくに心にとめておく必要がある。わが国は、十九世紀の中葉以後百年にわたって、侵略される身の半植民地になったとはいえ、またいまもなお経済的に文化的にたちおくれた国であるとはいえ、条件がかわったのちには、大国主義の傾向は、もし極力これをふせぎとめなかったなら、かならず重大な危険となるであろう。それだけでなく、こうした危険は、こんにちすでに、われわれのなかの一部のあいだに芽生えはじめていることを、指摘しておかなければならない。そのために、中国共産党第八回全国代表大会の決議と中華人民共和国政府の十一月一日の声明は、いずれも自己の人員にたいして、大国主義の傾向に反対する任務を提起したのであった。

しかし、プロレタリアートの国際的団結をさまたげるものは、大国主義だけではない。歴史上、大国は小国を尊重しないばかりか、圧迫さえし、小国は大国を信頼しないばかりか、敵視さえしてきた。この二つの傾向は、各国人民のあいだから各国プロレタリアートの隊伍のなかにいたるまで、多かれ少なかれのこっている。したがって、プロレタリアートの国際的団結をつよめ

大国主義と民族主義

るためには、まず、大きいほうの国で大国主義的傾向を克服する以外に、小さいほうの国でも民族主義的傾向を克服しなければならない。大国におけると小国におけるとをとわず、もし共産党員が自国や自民族の利益を国際プロレタリア運動の全体的利益に対立させ、前者に名をかりて後者に反対し、実際行動のうえで真剣にプロレタリアートの国際的団結をまもらず、かえってこの団結をそこなうようなことをするならば、それは、国際主義にそむき、マルクス・レーニン主義にそむく重大な誤りである。

スターリンの誤りは、かつて東欧のある国々の人民の大きな不満を買った。だが、これらの国国のある人びとのソ同盟にたいする態度も、公正を欠いていた。ブルジョア民族主義者は大童になってソ同盟の欠点を誇張し、ソ同盟の貢献を抹殺している。彼らはつぎの点、つまり、もしソ同盟が存在していなかったならば、帝国主義はこれらの国やこれらの国の人民をはたしてどのように取り扱うかという点については、誰にも考えさせないようにしようとしている。われわれ中国共産党員は、ポーランドとハンガリーの共産主義者の党が、げんざいすでに、悪質分子の活動——反ソデマをでっちあげ、兄弟諸国との関係のうえで民族的対立をあおりたててきた活動を懸命にとりおさえ、また、いちぶの大衆をはじめいちぶの党員のなかにまである民族主義的偏見をとりのぞきはじめているのを見て、よろこびにたえない。これは、あきらかに、社会主義国の

友好関係をかためるうえに、さし迫って必要な措置のひとつである。

ソ同盟のこれまでの対外政策が、基本的にいって、国際プロレタリアートの利益に合致し、被圧迫民族の利益に合致し、世界人民の利益に合致していたことは、われわれがまえに指摘したとおりである。ソ同盟の人民は、これまでの三十九年のあいだ、各国人民の事業を助ける面で、ひじょうに大きな努力と英雄的な犠牲をはらってきた。この偉大なソ同盟人民の歴史的な功績は、スターリンのおかしたいくつかの誤りによって、いささかもうすれるものではない。

ソ同盟政府がソ同盟とユーゴスラビアの関係を改善する面ではらった努力、一九五六年十月三十日のソ同盟政府の宣言、および一九五六年十一月のポーランドとの会談は、これまでの対外関係にあった誤りを徹底的にとりのぞこうとするソ同盟共産党とソ同盟政府の決意をしめすものであった。ソ同盟のとったこれらの措置は、国際プロレタリアートの団結の強化にたいする重大な貢献のひとつであった。

帝国主義者が各国の共産主義の隊伍に狂気じみた攻撃をくわえてきている今日、各国のプロレタリアートが相互の団結をつよめるために努力する必要があるのは、ひじょうにはっきりしたことである。大敵をまえにして、国際共産主義の隊伍の団結をさまたげるような言論や行動に出ることは、どのような名義によるものにせよ、各国の共産主義者や勤労人民の同情を期待しがたい

のである。

ソ同盟を中心とするプロレタリアートの国際的団結をつよめることは、各国のプロレタリアートの利益に合致するばかりでなく、全世界被圧迫民族の独立運動や全世界の平和事業の利益にも合致するものである。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの広はんな人民は、切実な経験にてらして、誰が自分たちの敵であり、誰が自分たちの友であるかを容易に理解することができる。そのため、帝国主義がまきおこしている反共、反人民、平和反対の津波は、これらの諸州の十数億にのぼる人口のあいだで、きわめて少数のもののさびしい反響しかえられない状態にある。事実はつぎのこと、つまり、ソ同盟、中国その他の社会主義諸国および帝国主義諸国の革命的プロレタリアートが、エジプトの反侵略闘争の忠実な支持者であり、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国の独立事業の忠実な支持者であるということをあきらかにしている。社会主義の国々、帝国主義諸国のプロレタリアート、民族の独立をめざす国々のこの三つの力は、帝国主義に反対する闘争のなかで、共通の利害をもち、彼らの相互援助は人類の前途と世界の平和にたいして、このうえもない大きな意義をもっている。最近、帝国主義侵略勢力は、ふたたび国際情勢をある程度緊張させた。だが、さきにのべた三つの力の協同闘争により、これにくわうるに、平和を愛する全世界のその他のすべての力による共同の努力をもってすれば、こうした緊張もふたたび緩

和の方向にむけかえることができるのである。帝国主義侵略勢力は、エジプト侵略によってなんらうるところがなかっただけでなく、かえって大きな打撃をうけた。東欧に戦争の前哨基地をつくり、社会主義陣営の団結を破壊しようとした帝国主義の計画も、ハンガリー人民にたいするソ同盟軍隊の援助によって、すでに失敗に帰した。社会主義諸国は、資本主義国との平和共存、相互間の外交関係と経済・文化関係の発展、国際間の紛争の平和な話し合いによる解決、新しい世界戦争の準備にたいする反対、全世界における平和地域の拡大、平和共存の五原則の適用範囲の拡大をあくまで主張してきた。こうしたいっさいの努力は、かならずや全世界の被圧迫民族と平和を愛する人民のあいだで、ますます広い同情をえるであろう。国際プロレタリアートの団結がつよまれば、帝国主義の好戦屋たちも、軽々しく冒険に出るようなことはますますできなくなるであろう。したがって、こうした努力に帝国主義がまださからっているにしても、最後には平和の力が戦争の力にうち勝つであろう。

× × ×

国際共産主義運動の歴史は、一八六四年に第一インタナショナルがつくられたときからかぞえても、今日まで、わずか九十二年にすぎない。この九十二年間に、さまざまな紆余曲折はあったにせよ、運動全体はきわめて急速な発展をとげた。第一次世界大戦の期間には、世界の陸地の六

分の一をしめるソ同盟があらわれ、第二次世界大戦ののちにはまた、世界人口の三分の一をしめる社会主義陣営があらわれた。これらの社会主義国があれこれの誤りをおかしたので、敵は有頂天になり、いちぶの同志と友人はくるしみ、なかには共産主義事業の前途について動揺をきたすものさえあった。しかし、敵の喝采といい、同志や友人のくるしみ、動揺といい、すべて、いわれのないものである。プロレタリアートがはじめて国家を管理するようになってから、遅いのはわずかに数年、早いものでもものの数十年を出ていない。彼らにどんな失敗もおかすなといっても、それは無理である。短期間の、局部的な失敗は、これまでにあったばかりでなく、現在もあるし、これからもありうることである。だが、遠大な展望をもつものは、けっしてそのために失望したり、悲観したりすることはない。失敗は成功の母である。こんにちの短期間の局部的な失敗は、国際プロレタリアートの政治的経験をゆたかにし、それによって、将来のかぎりない歳月における偉大な成功のために条件をつくりだすものにほかならない。イギリスやフランスのブルジョア革命の歴史とくらべてみるとき、われわれの事業のなかのこれらの失敗はまったくとるにたりないものである。イギリスのブルジョア革命は、一六四〇年にはじまった。だが国王に勝利してのち、つづいてクロムウェルの独裁支配があらわれた。そしてまた一六六〇年の旧王朝の復辟をみた。一六八八年にいたり、ブルジョア政党は、クーデターによって、オランダから陸海軍

をひきつれた国王をイギリスに迎えいれ、こうしてやっとイギリスのブルジョア独裁を安定させることができた。フランスのブルジョア革命は、一七八九年に勃発してから一八七五年の第三共和国の成立をみるまでに八十六年の歳月をついやし、その期間は、進歩と反動、共和制と王制、革命のテロルと反革命のテロル、国内戦争と対外戦争、他国の征服と他国への降伏がたがいに織りまぜられ、とくに、動揺つねならぬ状態にあった。社会主義革命は、全世界の反動派の連合による圧迫をうけてはいるが、その道程全体ははるかに順調であり安定したものである。このことは、ほかでもなく、社会主義制度がかつてない強大な生命力をもっていることを物語るものである。最近の一時期に、国際共産主義運動はいくらかの挫折にあったとはいえ、われわれはそのなかから多くの有益な教訓をくみとった。われわれは、われわれの隊伍のなかのあらためなければならないいくつかの誤りをあらためたし、また現にあらためつつある。誤りがあらためられたあかつきには、われわれは、さらに強大となり、いっそう団結をかためるであろう。敵の予想に反し、プロレタリアートの事業は後退するのでなく、ますます好調に前進してゆくであろう。

だが、帝国主義の運命は、これとはまったく別物である。そこには、帝国主義と被圧迫民族とのあいだに、帝国主義国相互のあいだに、帝国主義政府と人民とのあいだに根本的な利害の衝突があり、この衝突がますます尖鋭化しているのに、これをなおす処方のできる医者がひとりもい

ないのである。

もちろん、新生のプロレタリアート独裁の体制には、いまのところまだいろいろな面に多くの困難があり、多くの弱点がある。だが、いぜんソ同盟が孤軍奮闘していた状態にくらべると、いまのわれわれはずっとめぐまれている。まして、新しく生まれでたものに困難や弱点のともなわぬものがあるだろうか？　要は未来にある。われわれの直面している道に今後なおどれほどの曲折があろうとも、人類は、最後にはかならず輝かしい目的地――共産主義にたどりつくのであり、これをはばむ力はどこにもないのである。

66.3.22

プロレタリアート独裁の歴史的経験

1963年6月　初版発行

定価　上製本 60 円
　　並製本 40 円

出版者　外文出版社
中華人民共和国
北京阜成門外百万莊

編号：（日）3050—611
3—J—341

（精）00093
（平）00058